



「教育実践研究論文集」第31号の発刊に寄せて

公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

支部長 熱田 恒雄

教職員の皆様には日頃より教弘保険を通じまして、(公財)日教弘千葉支部の事業に対してご支援とご協力をいただいておりますことに深く感謝申し上げます。また、教弘保険の拡大によりまして、教育振興事業が年々拡充を図ることができております。これもひとえに皆様のご理解とご支援の賜と重ねて御礼申し上げる次第です。

さて、この教育実践研究論文の募集事業は、千葉教弘の教育振興事業の大きな柱の一つとなっています。今回は学校部門24点、個人・グループ部門36点、合計60点と、昨年の38点を大きく上回る沢山の応募がありました。いずれも日々の教育実践への工夫改善と児童生徒の成長の様子をうかがうことができ、審査員の先生方からは、素晴らしい実践研究であるとの高い評価をいただくことができました。

厳正な審査の結果、今回入賞された方々は別掲の通りです。入賞者の皆様には心よりお祝いを申し上げます。また、今回入賞できなかった先生方におかれましても、引き続き研究を深めまして、その成果を教育実践に生かしていかれましてを切にお願いするとともに、再度応募いただきますようご期待申し上げます。

今教育現場では、教職員の多忙化が大きな問題となっています。27年2月に県教委より刊行された「業務改善リーフレット：児童生徒と向き合う時間を確保するために」の勤務実態調査によりますと、事務的な業務、生徒指導、補修・部活動の指導の時間が増えている一方、授業準備や成績処理の時間が大幅に減り、特に自主研修の時間は5分の1程度に減っているようです。授業準備や事務処理の残り等は残業時間に行っている様子が見えがえします。

こうした多忙を極める中であっても、自らの指導力の向上を図ることは、教職員にとって重要な使命であります。本冊子に掲載された研究の成果を参考として日頃の教育実践の改善に役立てていただければ、この事業は大きな成果を上げることとなり、当財団としてこれに勝る喜びはありません。

当支部としましては今後も公益財団法人として事業の充実を図り、児童生徒の学びやすい環境づくりや学校教育への支援など、「最終受益者は子ども達」としての教育振興事業を推進してまいります。多くの先生方に教弘の会員となっただき、引き続きご支援をいただきますようお願い申し上げます。

末筆ながら、この間審査委員長としてご指導いただいた総合教育センター所長 安藤久彦様をはじめ各審査委員の先生方、更には論文をお寄せ頂いた全ての方に感謝とお礼を申し上げまして、巻頭のご挨拶とさせていただきます。



教育実践研究論文の効用

学び続ける学校と教員であるために

審査委員長

千葉県総合教育センター所長

安 藤 久 彦

私たちが生きる社会では、情報化やグローバル化といった変化が人間の予測を超えて加速度的に進展しています。子供たちが成長した社会は、ますます変化が速くなり、今まで以上に複雑で予測困難になるだろうと言われています。そうした中、未来を生きる子供たちに、今どんな資質・能力を身につけさせる必要があるのか、子供たち一人一人が持つ可能性を引き出して豊かな人生を実現させるためにどんな教育が大切なのか、主体的・対話的で深い学びの視点からの学習過程の改善、カリキュラム・マネジメントの実現などをキーワードとして、新しい学習指導要領の方向性、必要な方策等が具体化してきました。

その内容は、例えば外国語教育の抜本的な強化に伴う小学校における外国語教育の改善・充実、子供たちが考え、議論する道徳教育への転換、幼児教育と小学校教育の接続、高大接続など学校段階間の接続をはじめ、取り組むべき課題は多岐にわたっています。私たちはその重さに押しつぶされそうにもなりますが、今こそ国の動向を的確に捉え、それぞれの学校、地域の実情を踏まえて、教員の叡知を結集していくことが肝要です。

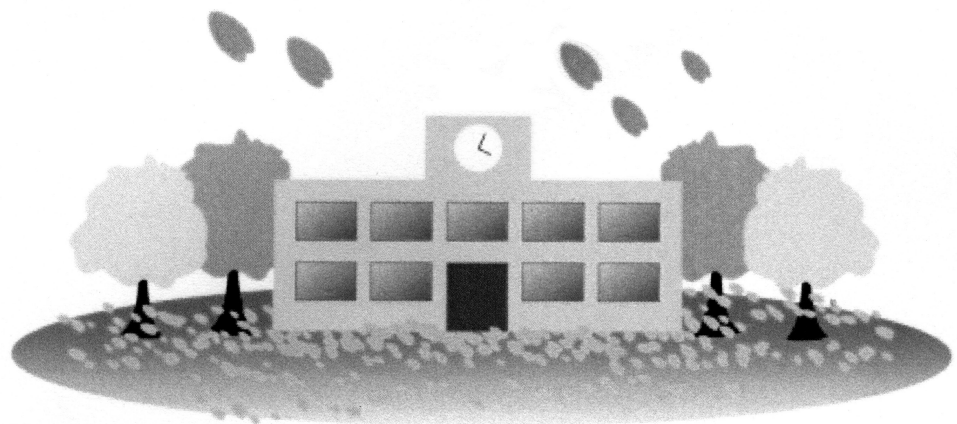
こうした変革の時期に、本年度も公益財団法人日本教育公務員弘済会千葉支部主催による「教育実践研究論文」の募集に、個人部門に36点、学校部門に24点の合計60点の応募がありました。昨年度を大きく上回る多数の応募がありましたことに、県下の先生方の熱意を感じ、先ずは応募された皆様に敬意を表したいと思います。

応募論文を読ませていただきましたが、学校が直面している喫緊の課題に積極的に取り組み成果を上げたもの、家庭・地域との連携・協働を充実させる創意あふれる実践、子供たちの能力を引き出して資質を高める意欲的な指導方法の研究、教育活動を円滑に進めるための校内体制のあり方など、これからの学校が迫られるテーマに挑んだ論文が多く見られ、どこの学校においても参考にできる意欲的な内容が目立ちました。

いずれも甲乙つけ難い論文に審査委員も侃々諤々、審査が白熱する中で、理論と実践が一体となり検証や分析ができているか、汎用性のある研究であるか、当該校の教育活動の改善に資するものであるかなどを観点として、個人・グループ部門、学校部門の受賞者を決定していきました。優秀賞については主催者側が予定した数と異なる点数の選定となりましたが、様々な観点から厳正な審査を行った結果と御了解いただければ幸いです。

先に述べましたとおり、変革の時代だからこそ、教員が学び続ける姿勢とその成果がますます重要になってきています。論文に応募された先生方、受賞された皆様には、常に学び続ける教員の代表として、千葉県の教育を力強く牽引していただくことを期待いたします。併せて、ここに掲載された研究論文に刺激を受けた多くの先生方が、さらに新しい研究テーマにチャレンジして、あらためてその成果を次年度以降の研究論文に応募するような流れができれば理想的だと感じます。

最後になりますが、教育実践論文を募集されました公益財団法人日本教育公務員共済会千葉支部様に敬意を表するとともに、貴法人のますますの発展を祈念して、講評とさせていただきます。



審 査 委 員

(敬称略)

審 査 委 員 長	千葉県総合教育センター 所長	安 藤 久 彦
審 査 委 員	千葉県総合教育センター 部長	今 関 文 章
審 査 委 員	千葉県高等学校長協会 会長	鈴 木 政 男
審 査 委 員	千葉県小学校長会 会長	池 田 文 彦
審 査 委 員	千葉県中学校長会 会長	柴 内 靖
審 査 委 員	元小学校校長	木 村 節 夫
審 査 委 員	元小学校校長	林 洋 子
審 査 委 員	元小学校校長	溝 江 晃
審 査 委 員	元小学校校長	鈴 木 郁 夫
審 査 委 員	元小学校校長	鈴 木 幸 代
審 査 委 員	元小学校校長	佐 藤 進
審 査 委 員	元中学校校長	泉 晴 行
審 査 委 員	元小学校校長	半 田 美智子
審 査 委 員	元特別支援学校校長	永 吉 諒
審 査 委 員	元小学校校長	小 寺 道 明
審 査 委 員	株式会社千葉教弘 代表取締役	藤 村 龍 一

受 賞 者 の 皆 様



— 目 次 —

あ い さ つ	1
公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部 支部長 熱田 恒雄 審査委員長 千葉県総合教育センター 所長 安藤 久彦	
審 査 委 員	4
〈最 優 秀 賞〉	
学校部門	
小中一貫教育の在り方について ～開校から2年半の取組を通して～	
成田市立下総みどり学園 校長 高山 勇	7
個人・グループ部門	
「伝える」力を育み、「伝わる」喜びを実感できる授業作り ～肢体不自由のある生徒による「自作英語昔話」の読み聞かせを通して～	
千葉県立桜が丘特別支援学校 教諭 大高 勇輝	11
〈優 秀 賞〉	
学校部門	
児童一人一人の思考力・表現力を高める学習指導の在り方 ～4つの学習プロセスとユニバーサルデザインを取り入れた算数科指導を通して～	
銚子市立清水小学校 校長 滑川 雅宏	15
悩みを抱える児童を支援する校内体制づくりについての研究 ～総合的・一体的に児童を見守り支援する校内体制づくりへの取り組み～	
千葉市立松ヶ丘小学校 校長 川邊 敏明	19
個人・グループ部門	
自己を見つめ、思いや考えを豊かに表現する児童の育成 ～「MY随筆集」づくりを通して～	
千葉市立検見川小学校 教諭 安部 功貴	23
推論する能力を育てる理科学習 ～思考を視覚化し、説明し合う活動を通して～	
千葉市立宮崎小学校 教諭 兼子 稔	27

〈優良賞〉

学校部門

教育課程に位置づけた学校図書館活用の実践

～自ら学び、思考し、表現する生徒の育成を目指して～

袖ヶ浦市立蔵波中学校 校長 御園 朋夫 …… 31

共に学び合う児童の育成

～算数学習における表現活動の工夫～

流山市立流山小学校 校長 田根 洋 …… 35

個人・グループ部門

主体的に学習にとりくむ児童を育てる教材の工夫

～第5学年「メダカのたんじょう」にクサフグの教材を加えて～

勝浦市立興津小学校 教諭 田崎 優一 …… 39

わくわくドキドキする魅力的なゲームを通しての社会性の育成

～自閉症・情緒障害通級指導教室2年間の取り組み～

松戸市立上本郷小学校 教諭 湯本 諒
教諭 渡邊 裕子
講師 夏井 友紀 …… 43

学力向上を目指す学校経営

～子供の学力を保障する学校を目指して～

柏市立田中北小学校 校長 池田 一美 …… 47

随筆の特性を活かして「書く力」を高める学習活動の工夫

～個性を引き出し、伝え合う場づくりを通して～

旭市立滝郷小学校 教諭 見山 望 …… 51

〈奨励賞（佳作）〉 …… 55

最 優 秀 賞

小中一貫教育の在り方について

～開校から2年半の取組を通して～

成田市立下総みどり学園

校長 高山 勇

I はじめに

本校の学区である旧下総町は、成田市の北部に位置し、北には利根川、南には下総台地が広がっており、稲作や畑作が盛んな地域である。小御門神社の周辺に、七福神それぞれを祀る寺社仏閣が点在し、昔からの伝統が根付いている地区でもある。

旧下総町内には、小学校4校、中学校1校があったが、それぞれの小学校では児童数の減少が大きな課題となっていた。

平成20年度に、成田市学校適正配置調査報告の中で、下総地区4小学校の統合が提言され、先進校視察や地域説明会を重ね、4小学校の統合が決定した。その後、開設準備委員会を立ち上げ、統合に向けた準備を進めた。

教育委員会からは、中学校の敷地内に小学校校舎を接続する形で建設する方針が示された。開設準備委員会では、この校舎の特性を生かし、小・中の連携をより強いものとするために、小中一貫教育校として開設することを決定した。

平成26年4月、4小学校が統合し、小学校1年生から中学校3年生までが一緒に学校生活を送る小中一貫教育校としてスタートした。



左側：新設小学校校舎 右奥：既存中学校校舎

なお、平成28年度の段階では、義務教育学校としての認可とはらず、成田市立下総中学校と成田市立下総小学校が存在しており、「下総みどり学園」は通称として用いている。

また、児童生徒、保護者、教職員などが一貫教育を意識しやすくするために「小1」「中3」という呼び方はせず、「1年生」から「9年生」という呼び方を取り

入れている。

II 研究の内容

1 研究のねらい

本校は、千葉県内では3校目、地区内では最初の小中一貫教育校としてスタートした。開校までの地域説明会では、9年間連続した教育課程を編成することで、中一ギャップが起きにくくなることや、子どもたちの規範意識や思いやりが育つというメリットが説明された。しかし、地域の方々からは「小さな子が大きな子から悪い影響を受けるのではないか」という声があるなど、経験したことのないシステムに対する大きな不安があることが明らかになった。

これらの不安を払しょくし、地域から信頼される学校づくりを進めるとともに、9年間一貫した教育の中で普通教育の目標を達成するための方策はどうあるべきかを考え、次の内容について取り組んできた。

(1) 教育課程の工夫

- ① ブロック制の導入
- ② 5年生からの教科担任制の導入
- ③ 5年生からの50分授業の導入
- ④ 全校縦割り班の導入
- ⑤ 5年生からの生徒会・部活動の導入

(2) 行事の工夫

- ① 全校行事の工夫
- ② ブロックごとの行事の工夫
- ③ 異学年交流による行事の工夫

これらの取組の成果と課題をまとめることにより、地域の先駆けとしての責務を果たしたい。

2 成果と課題

(1) 教育課程の工夫

中1ギャップの大きな原因として、学習内容が難しくなることや、部活動内での先輩後輩の人間関係などの急激な学校生活の変化があげられている。

本校では9年間をととした一貫教育学校のメリット

を生かし、少しずつ学校生活に変化を加えていくように工夫することで、中1ギャップが解消されるのではないかと考えた。

① ブロック制の導入

発達段階に応じたよりきめ細かな指導を行うために、9年間の4・3・2の3つに区分するブロック制を導入した。1～4年生を前期ブロック、5～7年生を中期ブロック、8・9年生を後期ブロックとし、4年生7年生を各ブロックのリーダー、9年生を全校のリーダーとして位置づけている。行事を行う際にはブロックを意識した企画とし、リーダーの活躍の場が多くなるように工夫している。

4年生は4月に、1年生を迎える会を企画し、朝の支度や給食の配膳を手伝っている。また、11月には就学時健康診断の手伝いを行うなど、通常6年生が中心となる役割を多く担っている。

また、通常中学1年生が一番年下の立場であるが、本校の7年生は中期ブロックの最高学年として、常に5・6年生の手本となるように意識して行動している。

○4年生は前期ブロックのリーダーとして、責任と喜びを感じながら生活しており、飛躍的に言動の落ち着きが見られるようになった。

○7年生は中期ブロックのリーダーとして、自覚と意欲を持って学校生活を送っている。

○5・6年生は7年生や8・9年生を憧れとして見るようになっている。

② 5年生からの教科担任制の導入

中学校に入学し、学習が難しくなることに加え、教科担任制となって毎時間の教員との人間関係づくりを難しく感じる子ども達がいる。本校では、早い段階から教科担任制を導入し、時間ごとに教員が替わる状況に慣れさせることで子ども達を感じるギャップを解消できるのではないかと考えた。

そこで、本校では5年生から、音楽、家庭科、図工の時間を中心に、中学校免許保有者が指導する時間を設けることとした。この3教科は5～9年生までの指導をそれぞれ1人の専科教員が行っており、7年生になっても同じ教員から指導を受けられるという安心感につながっている。これ以外にも、国語専科教員や英語専科教員、ブロック内担任による交換授業を取り入れることで、中学校とほぼ同等の教科担任制を導入することができた。

○5年生からの教科担任制によって学習意欲が飛躍的

に向上している。

○5年生は、教科担任制や部活動などで多くの教員と接することに喜びを見出している。

●小学校分の専科教員の数を確保することができず、一部の教科担任の持ち時間数が増えてしまう。

●小学校学級担任として、子ども達の普段の様子を把握しにくいとの声があり、2年目からは担任がT2として多くの授業に入っている。

③ 5年生からの50分授業の導入

本校では、導入したブロック制や教科担任制を効率よく運用するために、5年生以上の学年で50分授業を導入することとした。一つの学校内に45分と50分の学年が混在することとなるため、一日の時程を工夫し、一日の始まりと終わり、清掃開始時間は全校で揃えてチャイムを鳴らす、それ以外の時間はノーチャイムで生活することとした。

○50分授業は5・6年生にとって長すぎず、むしろ意欲を持って、集中して学習に臨むことができて

いる。

○低学年の児童も常に時計を見ながら行動するようになって



縦割り清掃



生徒会選挙

④ 全校縦割り班の導入

高学年児童生徒の責任感や思いやりが育つとともに、低学年が高学年を慕う心やあこがれる心が育つなど、互いの成長にプラスになるであろうと考え、全校縦割り班を導入している。

縦割り班は一班20名前後で、1～9年すべての学年から2～3名が所属する編成になっている。この編成は班員の所属意識とつながりを養うために、1年間固定としている。この縦割り班活動は、行事のみではなく、平日頃からの深いつながりが生まれることを期待し、日々の清掃活動にも取り入れている。

○8・9年生が非常に穏やかで優しく、自分勝手な言動もほとんど見られなくなっている。

○日々の清掃活動では、高学年が低学年に対して掃除の仕方を指導したり、手伝ったりしながら協力する姿がいたるところに見られる。

- 8・9年生の小さな子達に対する指示が飛躍的にうまくなってきている。
- 高学年は自分を慕ってくる低学年を世話したり、手本となったりすることで、自己肯定感や達成感が高まっている。
- 1・2・3年生は縦割り活動をととても楽しみにしており、年の離れた上級生から様々なことを吸収している。
- 3年生は年を経るごとに非常に落ち着いてきており、幼稚な言動が激減している。
- ⑤ 5年生からの生徒会・部活動の導入
児童会、生徒会を分けるのではなく、一つの生徒会に5年生から参加している。生徒会役員も5年生から立候補し、生徒会選挙を行い、5年生以上の投票により決定している。また、委員会活動も5年生以上と一緒にっており、日々の配膳室の手伝いや、清掃用具の確認、図書の貸し出し業務など、小中で分けることなく一緒になって活動している。
また、5年生から中学校の部活動に参加している。中学校の試合に参加することはないが、7年生になってからの活躍を夢見て、先輩からの指導を受けながら練習に励んでいる。
- 8・9年生が5・6年生に対して、優しくわかりやすく指導する姿が見られる。
- 8・9年生の言動を模範とし、5・6年生は話合いの進め方や、計画の立て方などを学習している。
- 生徒会活動や部活動は、学級や縦割り班とは異なる人間関係を学ぶよい機会となっている。

(2) 行事の工夫

1年生から9年生までが様々な活動をとおして交流を深めることを目的とし、全校単位、ブロック単位、学年単位で行う行事を工夫している。

常に小さい子が楽しめるように、わかりやすいように考えながら活動することで上級生の思いやりや優しさが育つと考え、それぞれの行事の中では、年長の子ども達が小さい子ども達に係わる機会を意図的に多く設定するようにしている。

① 全校行事の工夫

4月には全校縦割り遠足を実施している。1年生が手を引かれ、運動公園まで片道4kmの道のりを歩く。途中、高学年が1年生にペースを合わせたり、帰りに疲れた1年生をおんぶしたり、たくさんの微笑ましい

様子が見られる。公園では、ジャンケン列車やだるまさんが転んだなど、小さい子に合わせたゲームをして楽しんでいる。

9月には全校で体育祭を実施する。それぞれ学年の種目に加え、縦割り長縄跳びを行って、班の結束を高めている。縄回し役やタイミングに合わせて背中を押して送り出す役の上級生は小さい子が跳びやすいように工夫している。

○ジャンケン列車や長縄跳びでは、9年生も一緒になって、はじけんばかりの笑顔で楽しんでいる。

○勝敗第一ではなく、跳べなかった子が跳べるようになったことをみんなで喜ぶ姿が見られる。

② ブロックごとの行事の工夫

1年生を迎える会、業間体育活動、就学时健康診断のお手伝いなどは、前期ブロックリーダーの4年生が中心になって行っている。中後期ブロックでは生徒会活動や部活動など、児童生徒同士が自治的に参加する機会を設けている。また、秋には前期ブロックの学年発表を中心とした文化祭、中・後期ブロックによる合唱コンクールを行っている。

9年生の歌声を初めて聞く5年生は、声の大きさやハーモニーの素晴らしさに目を見開いて驚いている姿が印象的である。

○通常、6年生が中心となって行う1年生を迎える会や、就学时健診の先導役を4年生が行うことで、早い段階からリーダー性や責任感が育っている。

○低学年の児童は、上級生に対して素直に「ありがとう」と言えるようになっている。

○上級生の行動や発表する姿に自分の将来の姿を重ね合わせ、憧れの念を抱くようになっている。



縦割り遠足



合同宿泊学習

③ 異学年交流による行事の工夫

5・7年生による合同宿泊学習、8年生による4年生へのブックトーク、6・7・8年生による職場体験発表会など、上級生が下級生に教える、お世話する活動を意図的に取り入れるようにした。

7年生は宿泊学習で、2年前に自分たちがしてもらったことを思い出しながら、もっと楽しんでもらおう

と一生懸命企画・運営する姿が印象的である。

- どの活動も自分たちが楽しむのではなく、下級生をいかに楽しませるかを考えた活動になっている。
- 下級生は上級生の活動を見て、次は自分たちがやる番だという意識が育っている。

III まとめ

開校から3年目、様々な取組によって児童生徒、教職員に次のような変化が見られるようになってきた。

【児童生徒の変化】

- 中1ギャップは見られない。
- 学年を超えたいじめを訴える子どもは一人もいない。
- 不登校については減少している。
- 今まで不登校であった生徒の出席日数が伸びている。
- 学年が上がるほど、子ども達は礼儀正しくなっている。
- 年々児童生徒の情意面が向上している。(図1, 図2)
- 特に自己肯定感やチャレンジ精神の伸びが著しい。

【教職員の变化】

- 小中学校の文化を超え、それぞれの良さを取り入れた生徒指導、学級経営、教科指導が行われるようになった。
- 中学校教員の言葉遣い、指導の姿勢がとても優しくなった。
- 小学校教員も毎週の生徒指導会議に参加し、全体で共通理解を図ることで、一人の担任が問題を抱え込むことなく、組織として対応できるようになった。

これらの変化は、小中一貫教育校として、小中学生が同じ敷地内の連続した校舎で生活していることや、開校直後に始めた縦割り班による毎日の清掃活動、小中学校教員が一つの職員室で共通理解を図りながら協働していることが大きく関わっているものと思われる。

反面、開校初年度は特色ある新しい学校を創出するために、企画や打ち合わせに多くの時間を要し、職員の退勤時間も遅くなる傾向にあった。また、敷地と校舎が2校分あることで、環境整備や施錠の確認、設備の保守管理にも時間がかかるといった面もあった。しかし3年目となり随分解消されてきていると感じる。

日々の取組の大変さや小中学校の文化の壁を越えて新たな「下総みどり学園の文化」を創造することで見えてくる子ども達の成長は何物にも代えがたいものがある。

今後は、それぞれの行事の反省点を活かし、更なる充実を図ると同時に、多くの子ども達に成功体験を味わわせることができるような活動を創出していきたい。

図1 6年生情意面の変化（全国学力学習状況調査より）

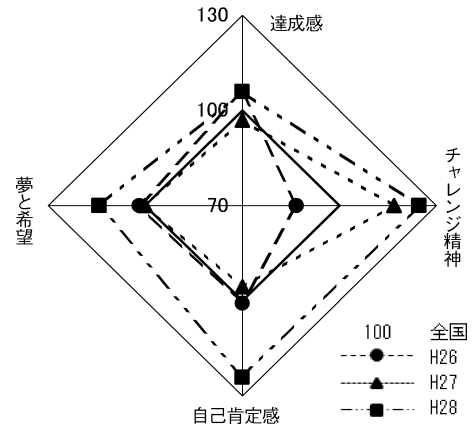
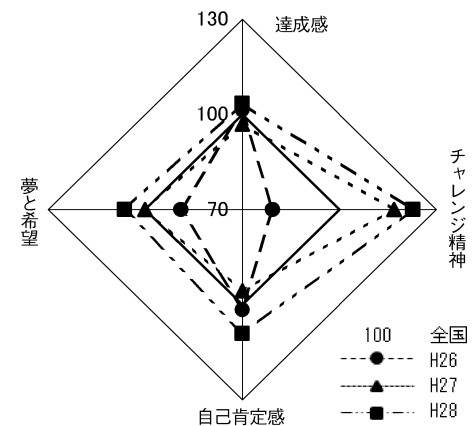


図2 9年生情意面の変化（全国学力学習状況調査より）



IV おわりに

開校前に小中一貫教育をとおして中学生が優しくなるであろうことは予想していたが、中学生が小学校低学年に接する際の柔和な表情が同級生や教師に接する際にも見られると同時に、落ち着きも見られるようになってきた。無条件で中学生を信頼する小学生の存在が、中学生に自己有用感を醸成させたのだと考える。

また、そのような中学生を見て、5・6年生に「カッコいい」「見習いたい」という感情が芽生え、言動の落ち着きが増してきたのはうれしい誤算であった。

下学年が9年生に憧れを抱き、目標としながら日々の活動に誠実に取り組む今の状況を更に発展させていきたいと考える。

「伝える」力を育み、「伝わる」喜びを実感できる授業作り

～肢体不自由のある生徒による「自作英語昔話」の読み聞かせを通して～

千葉県立桜が丘特別支援学校

教諭 大 高 勇 輝

1 主題設定の理由

本校は肢体不自由特別支援学校である。複数の教育課程が編成されており、児童生徒一人一人の実態に応じた指導・支援に取り組んでいる。本校では、「発信し、伝える力を育てる」ことを大切にしている。個々の発達段階に応じて、自分なりに表出し、外へ発信することを通して、他者との関わりを広げ、自己理解や他者理解につなげていくことをねらいとしている。また、障がいのある人もない人も互いを知り、認め合うことで、共生社会実現のきっかけにしたい、という強い願いが基盤となっている。

しかし、肢体不自由のある児童生徒は、表出上の困難を抱えていることや、学級の構成人数が1～6人と少人数であり、限られた人間関係の中で生活している現状がある。そのため、「伝える」経験を十分に得られず、他者とのコミュニケーションに苦手意識をもつ生徒も少なくない。

私は中学校に準ずる教育課程で英語を担当している。生徒は様々な学習上の困難を抱えているが、一人一人が豊かな発想をもって、自己表現活動に取り組んでいる。しかし、発表する場合は主に教室内に限られ、互いをよく知る仲間に対して「伝える」意義を見いだせない生徒もいた。また、日本語で伝えることにも苦手意識をもつ生徒にとって、英語で伝えることはより大きな障壁となっていた。

こうした実態から、肢体不自由のある生徒が英語で表現し、発信することに喜びを見出せるような授業作りの必要性を強く感じていた。生徒の「伝える」力の向上は、英語学習の充実に加え、日常生活の様々な場面において必要であると考え、本主題を設定した。

2 研究仮説

「自作英語昔話」の読み聞かせを通して、伝える場を段階的に設けることで、「伝わる」実感や自信を伴いながら、英語で表現しようとする意欲の向上及び「伝える」力の育成を図ることができるのではないかと考えた。

3 研究の方法

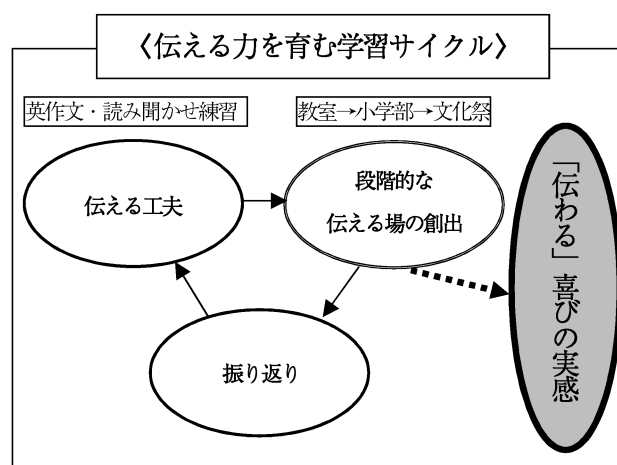
(1)『昔話』の活用

肢体不自由のある生徒の「伝える」力を育むために、まず、「伝える」ことに対する苦手意識を軽減することが必要であると考えた。そこで、昔話「大きなカブ」を題材として扱い、帯単位として、昔話の読み聞かせ活動を行う。「大きなカブ」は多くの人が内容を知っているため、英語でも聞き手は理解しやすく、語り手は「伝わる」実感をもちやすいと考える。また、リズムのあるセリフやチャンツを多く取り入れることで、インプットを容易にし、アウトプットへスムーズにつなげ、英語で表現する楽しさを感じられるようにしたい。

「昔話」の活用は、アレン玉井光江先生が提唱する「小学校英語教育におけるストーリーと活動を中心とした学習」に着想を得ている。本研究では、アレン玉井先生が考案された「大きなカブ」の台本を、中学生向けに私が加筆したものを用いる。オリジナルのセリフを書き加える表現活動を通して、生徒の豊かな発想を引き出しながら、「伝える」意欲の向上を図っていく。

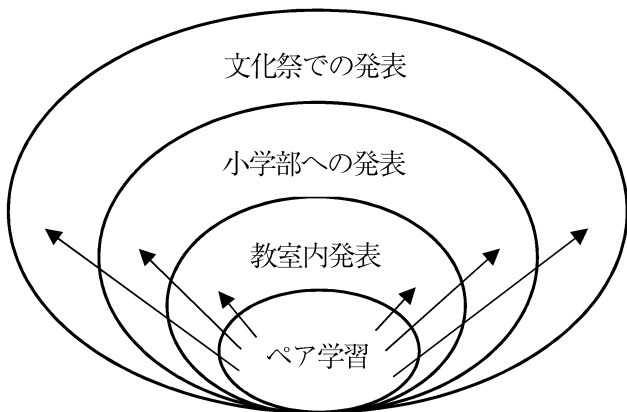
(2)「伝える力を育む学習サイクル」の確立

「伝える」力を育むためには、わかりやすく伝えようと試行錯誤しながら、伝える経験を重ねていくことが重要であると考えた。そこで、「伝える工夫」→「発表」→「振り返り」→「よりよく伝える工夫」→「再発表」・・・という学習サイクルを確立し、その中で、生徒が「伝わる」喜びを実感できるようにしたい。



学習サイクルの中では、ペア学習を中心とした「協働的な学習」を進めていく。ペア学習を通して、身体の動きの不自由さや学力差を互いにカバーし合いながら取り組む姿を期待している。また、「段階的な伝える場の創出」を図ることで、生徒がスモールステップで自信をつけられるようにしていく。

【段階的な伝える場の創出】



4 研究の実際

(1) 生徒の実態

中学校に準ずる教育課程で学ぶ中学部3年生の4名を対象に行う。4名とも車いすを自走して生活している。それぞれの生徒が姿勢保持の難しさや手指動作の不自由さなどの学習上の困難を抱えているが、どの生徒も意欲的に学習に取り組んでいる。

2名は英語を得意としており、他2名はあまり得意ではない。得意な生徒とそうでない生徒の学力差は大きい。昔話の読み聞かせに協力して取り組み、伝えようと努力する中で互いに高め合い、「伝わる」喜びを分かち合っている。

(2) 昔話の内容理解

まず、先述した台本を用いて、教師が昔話「大きなカブ」の読み聞かせを行った。内容理解の視覚的な補助として、大型絵本「大きなカブ」を用いた。

読み聞かせの後、生徒に物語の台本を配り、ペアで分析を行った。聞き取ったセリフと実際のセリフを比べることで、『聞く』だけでなく、『読む』ことを通した内容理解を図った。その際、英語が得意な生徒と得意ではない生徒をペアにすることで、わからないことを質問したり、一緒に調べたりしながら内容理解を進められるようにした。

教師による読み聞かせと台本の分析を繰り返すと、生徒が発話できるセリフの量は増え、正確さも向上し

ていった。5回目には全員がほぼ全てのセリフを発話できるようになった。

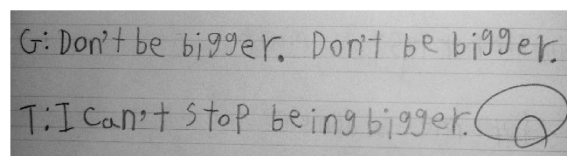
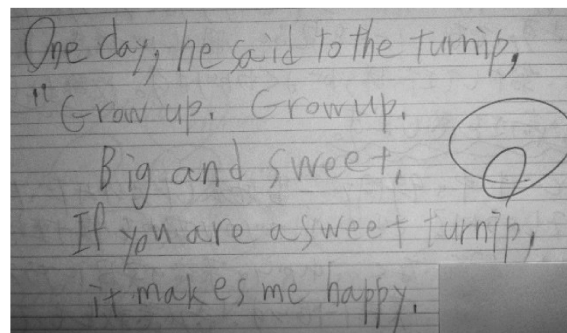
(3) 昔話づくり

① 英作文

インプットした昔話をもとに、ナレーションの書き換えやセリフの書き換えを行った。英作文もペアで行うことで、動作の不自由さや学力差をカバーし合いながら取り組むことに加え、「発想の広がり」を期待した。

手指動作の不自由さによって筆記に困難を抱える生徒は、英訳を中心に行い、同じペアの生徒が文を書きおこしていった。その中で、単語の綴りや意味を確認し合ったり、一緒に調べたりするなど、協力して取り組む様子が見られた。

また、新出表現の使役動詞 **make** を活用したり、リズムを意識したセリフを作りに取り組んだりする姿が見受けられた。以下は、おじいさんがカブに「大きな大きなカブになれ」と言う場面の各ペアの作文例である。それぞれのペアごとに「発想の違い」が見られる。



② 読み聞かせ練習

「自作英語昔話」を作った後、発表に向けてペアで読み聞かせ練習に取り組んだ。生徒はお互いの障がいの状態などを考慮しながら、配役やセリフの分量を決め、ジェスチャーをつけるなどの工夫をした。

読み聞かせにおいて、英語を自分の言葉として操作できるようになるためには、繰り返し暗唱練習が必要である。英文暗唱は単調で機械的な学習になりがちであったが、生徒は「読み聞かせする」という明確な目的意識をもって、意欲的に取り組んだ。そして、家庭学習につながるようになった。それまでほとんど家庭学習をしていなかった生徒も「仲間のために」と取り組み、授業でその成果を確認し合うようになった。

練習を進める中で、聞き手の内容理解を補助する視覚教材について生徒と話し合った。「車いすのため、大型絵本はめくりにくい」との声から、アレン玉井先生の著書「ストーリーと活動を中心とした小学校英語」に収録されている鮮やかなイラストカットを写真に撮り、パワーポイントで映し出すことで、リモコンで簡単にページ操作ができるようにした。生徒自身が視覚教材を作る中で、画面切り替えの効果音機能を使ってカブが抜けたときの音を表現するなど、わかりやすく伝えようとする工夫が見られた。



【生徒による視覚教材作り】

(4)「自作英語昔話」の読み聞かせ

①教室内発表

「段階的な伝える場の創出」の第一段階として、それぞれのペアによる教室内発表を行った。互いに同じ題材を使っているため、物語を「伝える」ことは比較的簡単であった。また、それぞれが独自にセリフを書き加えたことによる「発想の違い」から、お互いの発表に興味をもって聞き合うことができた。



【教室内発表の様子】

発表後には互いに感想を伝え合い、その後、それぞれのペアごとに振り返りの時間を設けた。「リズム感がないのは、まだ読み込みが足りないからだ」などと、課題を見つけ、改善に向けて練習に取り組んだ。

②小学部児童への読み聞かせ

「伝える場」の第二段階として、本校小学部の知的代替の教育課程の学級に「出張読み聞かせ」の協力を

申し出た。担任から「児童は英語に関心を持ち始めているため、ぜひお願いしたい」と受け入れてもらった。9月中旬から10月中旬まで週1回、授業前半の10分間で小学部の教室に出向き、「自作英語昔話」の読み聞かせを行った。普段関わりの少ない中学部の先輩が読み聞かせする姿は、小学部の児童にとって新鮮だったようで、どの児童もじっと耳を傾けていた。

1回目の発表後、低学年の学級で読み聞かせを行ったペアは、以下のように振り返った。

「小学生たちはポカンとしていた」
「ただ一方的に読み聞かせするのではなく、もっと小学生を巻き込みたい」

2人は児童の反応から、「伝わっていない」と感じ、「双方向的なやりとり」を課題と捉えた。その後、翌週の読み聞かせに向けて再び練習する中で、1人の生徒から以下のような提案がなされた。

「大きなカブの模型を作って、小学生と一緒に引っ張るのはどう？」

この提案から、白い大玉に緑のタオルの持ち手をつけて、カブの模型を作った。また、「セリフが難しいのではないか」という声もあがり、セリフの簡略化を図った。生徒たちは「参加型の読み聞かせ」を目指し、聞き手の反応を予測しながら練習に励んだ。

2回目の読み聞かせでは、「Grandma! Grandma! Come here quickly.」と、手招きしながら小学生を呼ぶと、女子児童は「私、おばあさん?」と少し戸惑い、恥ずかしがりながらもカブをひっぱる列に加わってくれた。そして、他の児童も次々と列に加わり、カブが抜けると「やったー」と笑顔を浮かべた。



【小学部児童への読み聞かせ】

以下は、2回目の読み聞かせ後の生徒の感想である。

「小学生を呼んで笑顔で列に加わってくれたとき、
『伝わった』と感じてうれしかった」

読み聞かせの回数を重ねると、児童はセリフを真似して一緒に声を出すようになり、互いに関わり合いを楽しむ様子が見られるようになった。

③学校行事での発表

10月28日～29日の文化祭（桜翔祭）では、英語劇「大きなカブ」の発表を行うことにした。中学部の知的代替の教育課程で学ぶ生徒11名も、総合的な学習の時間において英語や外国文化についての学習を行っていたため、協力して発表することになった。

生徒はそれぞれナレーターやカブ役を担当し、自分たちで作文したセリフを台本に取り入れた。読み聞かせする経験を重ねてきたことは、着実に自信につながっていた。体育館での発表に向けても、セリフの読み方や動作の細部までこだわり、工夫する姿が見られた。

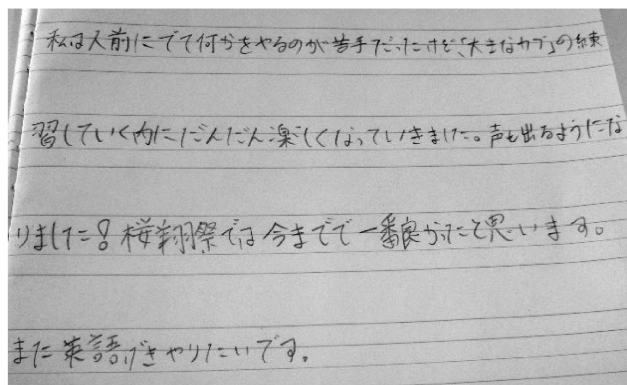
英語劇の発表は、10月25日の校内で発表を見合う日に1公演、桜翔祭2日間で各日1公演ずつ、計3回行った。生徒は多くの方から声援や好評をいただき、公演を重ねるごとに、さらに自信を深めていった。



【文化祭発表の様子】

迎えた最終日。発表が始まると、生徒たちの流れるようなセリフのリズムに合わせて手拍子が起こった。身体を揺らしながら発表を楽しむ観客もいた。そして、大盛況の中、英語劇は幕を閉じた。全3回の公演に会場した観客数は、本校の児童生徒と教職員、保護者、地域の方々を含め、延べ200人に及んだ。

以下は、発表を終えた生徒の感想である。



5 成果と課題

(1)成果

- ・ペア学習を通して、主体的かつ協働的に、伝える上での課題を見つけ、「伝えよう」と工夫を重ねたことが「伝わる」喜びの実感につながった。
- ・発信する場を段階的に広げたことで、様々な人へ「伝える」場を経験し、自信を深めることができた。
- ・物語を自作し、読み聞かせする活動を通して、英語で表現する楽しさを感じ、「発信したい」「またやりたい」という意欲を高めることができた。
- ・ペアでの読み聞かせ練習は家庭学習の動機づけとなり、反復練習によって英語表現の習熟を図ることができた。

(2)課題

- ・発信する意欲のさらなる向上には、生徒が心から「伝えたい」「発信したい」と思えるような素材を用意する必要がある。
- ・筆記の困難さや発音の不明瞭さなど、表出上の困難を抱える生徒の実態に応じて、コミュニケーションの補助的・代替的な方法のより一層の工夫が必要である。

〈参考文献〉

- ・アレン玉井光江 2011 「ストーリーと活動を中心とした小学校英語」 小学館集英社プロダクション
- ・アレン玉井光江 2010 「小学校英語の教育法 理論と実践」 大修館書店

優 秀 賞

児童一人一人の思考力・表現力を高める学習指導の在り方

～4つの学習プロセスとユニバーサルデザインを取り入れた算数科指導を通して～

銚子市立清水小学校

校長 滑 川 雅 宏

1 主題設定の理由

本校では、「たくましく生きる人間性豊かな実践力のある子どもの育成」を教育目標に掲げ、知的側面として、「よく考え進んで学ぶ子」を目指している。

児童は、授業中の活動や家庭学習では、指示された課題には一生懸命に取り組むが、自ら課題を見つけたり、進んで課題を見つけ、計画的に学習したりするなど、学習の習慣化に課題がある。全国学力・学習状況調査や千葉県標準学力検査の結果からは、算数を苦手とする児童が多くいることが示された。特に、「思考力」では、全国や県平均からの差も大きく、思考し、表現する力に課題があると言える。

そこで、算数の授業において、児童一人一人が自分の考えをもち、表現することができる指導・支援について研究する。研究を進めるに当たっては、特別支援学級が4つあるだけでなく、通常学級にも通級や支援を必要とする児童が多いことから、児童一人一人が授業に参加できる授業のユニバーサルデザイン化を手立ての一つとして取り上げ、特別支援学級との連携を重視した。さらに、筋道を立てて考え、表現することに楽しさを感じる児童を育てたいと考え、4つの学習プロセスを取り入れた算数的活動を実践していく。これらの取り組みを通じて、児童一人一人の学びを主体的で、深い学びに繋げていきたいと考える。

2 研究目標

算数科において、児童の思考力・表現力を育てるために、問題解決学習を基本とした効果的な指導法を、検証授業を通して明らかにする。

3 研究の内容

全職員が共通理解を図り、共同研究を基本とし、相互に協力し合って指導案や資料を作成したり、支援の仕方を検討したりしていく。

- (1) 研究主題及び副題に関する基礎的理論研究
- (2) 児童の実態把握と課題の分析

・アセスメントシートの活用

(3) ユニバーサルデザイン(以下 UD)を生かした指導案づくりとその実践

(4) UDの視点からの校内環境の整備

(5) 授業評価の工夫

・アセスメントシートと実態調査を生かし、抽出児と全体の変容の様子から授業内容を分析・評価する。

4 研究仮説

〈仮説①〉4つの学習プロセス(見出す、調べる、深める、まとめあげる)に沿った算数的活動を工夫することで、児童一人一人で自分の考えをノート等にかき表すことができ、思考力を高めることができるだろう。

〈仮説②〉ユニバーサルデザインを取り入れて指導・支援の工夫をすれば、児童一人一人が主体的に学び、基礎的な学力を身に付けることができるだろう。

5 清水小の「ユニバーサルデザイン」の考え方

全員が授業に参加することができ、児童一人一人が楽しく「わかる」「できる」ように工夫・配慮された指導方法を、算数授業を通して研究を進めていく。

合い言葉；「みんなでチャレンジ！楽しい算数」

6 本校の算数科において目指す児童像

低学年；「操作活動を通して、絵や図、言葉などで自分の考えを表すことができる」

中学年；「算数的活動を通して、言葉や数、式、図、表、グラフなどに自分の考えを表すことができる」

高学年；「根拠を明らかにし、筋道を立てて、言葉や数、式、図、表、グラフを用いてわかりやすく自分の考えを表すことができる」

研究当初の実態調査からは、学年に応じた具体的な姿に達している児童は、全校の2割で、自分の考えを1つ以上かき表すことができた児童は6割強、かき表すことができなかった児童については2割であっ

た。そこで、それぞれの段階に応じた手立てが必要だと考え、自分の考えを1つかき表すことができた児童をA児、1つもかき表すことができなかった児童をB児とし、一人ずつ抽出することで、算数科において目指す児童像に繋げる実態に合った効果的な手立てについて検証していく。

7 実践の概要

(1) 日常実践の全校での取り組み

- ①環境の統一と工夫（発達障害と環境の視点から）
- ・ 黒板周りをすっきりさせて、集中力を高める。
 - ・ 前面右側に時計、時間割、今日の予定、学習の予定を全校で統一して掲示し、徹底を図ることで、見通しをもたせることができるようにする。
- ②算数の指導過程の統一
- ・ 4つの学習プロセス（見出す、調べる、深める、まとめあげる）に応じた学習の進め方を掲示することで、児童が見通しをもち、主体的に学ぶことができるようにする。
 - ・ 授業を「焦点化」「視覚化」「共有化」するための指導過程上のポイントと手立てを、UDの考え方に基づいて指導案に示すことで、支援の視点を明確にする。

焦点化	視覚化	共有化
・ 素材文のわかることと聞いていることを明確にする。	・ 素材から課題を把握しやすいよう、場面絵を提示する	・ 小黒板、実物投影機等で、考えを提示し、共有

③時間の統一

- ・ 「何時まで」「何分間」とタイムタイマーなどで示し、児童が見通しをもって安心して学習や行動ができるようにする。
- ・ 朝自習の時間や授業の開始時刻、終了時刻を全校で統一することで、落ち着いて集中できるようにする。
- ・ 算数の授業において、児童が自分の考えをかき表す時間を十分に確保するとともに、適用問題も取り組むことができる時間を確保する。

※①～③を全校で統一することにより、進級後の戸惑い・不安を軽減する。

④アセスメントシートの実施と活用

[アセスメントシートの分析結果]

※評価欄；当該学級の標準得点以下の児童の多い順と人数

評価項目	評価	有効と思われる手立て	
		仮説1	仮説2
ことばを見つけよう	2	・ 黙読は避け、音読を十分に	・ 短い文をたくさんの児童で音読 ・ 1行だけ見える板目紙の活用
言語を素早く認識する力	13名	・ 読んだ内容の確認	・ 見やすい字体、サイズ、余白、色 ・ うまく話せないときの合図
書き写そう	5	・ 板書計画	・ たてよこを言語化 ・ 手元に板書と同じ手本
文を書き写す力	7名		・ うまく書けないときの合図 ・ 板書と同じプリント ・ 指示棒、ノートのとり方、マス目
見た数を答えよう	6	・ 視覚的な手がかりや具体物	・ 穴埋め式のワークシート ・ 回答欄に矢印
見た数字を記憶しておく力	6名		・ 繰り上がりの数の記入場所を決める ・ 形の特徴や位置の関係を言葉で表す

アセスメントシートを実施し、分析することにより、言葉や数の認知能力や記憶力、情報選択能力等、学級及び個人の具体的に支援を必要とするつまずきの内容を明らかにし、有効な支援の手立てを導き出す。

(2) 授業実践

各学年で行った検証授業における手立てや児童の様子について仮説ごとに述べる。

仮説1

2年「かけざん(3)」

ブロックを工夫して数える算数的活動を行ったことで、全員が自分の考えをかき表すことができた。教材提示装置で示す友達の考えを説明する場面を設けたことで、全部で12通り出た考えを共有し、考え方を広げ、思考力を高めることができた。



(友だちの考えを説明する児童))

5年「割合とグラフ」

体育の授業を素材にし、映像で提示したことで、素材文を理解し、学習意欲を高めることができた。グループ同士の話し合い活動を取り入れることで、表やグラフを活用した多様な考えをを発表することができた。

(グループで話し合う児童)



チャレンジ1 (知的支援学級)「表とグラフ」

交流学級に「好きな果物」という関心のある内容でアンケート調査をした結果を素材にし、一人一人の興味や能力に合わせた方法で、算数的活動を工夫した。表づくりの問題を解決していく中で、児童間の交流が深まり、意欲的な学習を展開できた。また、できた表をもとに話し合う活動を行う中で、表のわかりやすさに気付き、一人一人が問題解決の喜びを感じることができた。4つの学習プロセスに沿って学習を進めたことで、学習に見通しをもち、安心して学習に参加することが出来たと考える。

仮説2

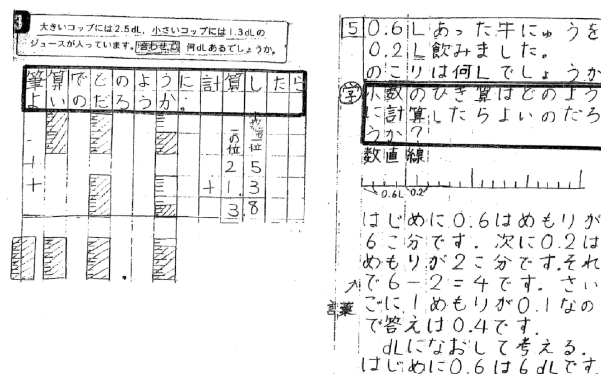
1年「ひき算(2)」

素材場面を演じながら提示したことにより、印象に残る素材提示となった。既習事項や「式」「言葉」「絵」等の考える手段を提示したことにより、児童が進んで考えることができた。深める場面で、ペアで伝え合う活動を取り入れることにより、比較検討へ円滑に移行した。

3年「小数」

板書とノートの構造化を図ったことで、児童が見通しをもって主体的に自力解決に取り組むことができた。また、数量の認識を確かなものとするため、視覚的な手がかりとして液量図や数直線などの補助プリントを用意し、パターン化して学習を積み重ねたことで考え方が定着し、自分の考えを進んでかくことが出来るようになった。

(液量図や数直線などのかき表す児童のノート)



4年「分数(3)」

液量図や具体物の提示によって、児童が興味をもち、自力解決に取り組むことができた。液量図やテープ図を活用し、色を塗って求める量を示すことで、全員が自分の考えをかくことができた。図で考えを表すことができた児童は、ペア学習で説明し合うことで考えを深め、自信をもって全体での発表することができた。

6年「比例と反比例」

自分の考えをかき表すヒントとして既習事項や説明方法のキーワードの提示を行った。解決方法やその理由などの考えを説明することが苦手な児童も自分の考えをかき表すことができた。また、ワークシートにより、自分の考えを整理することができた。

A 児の様子	B 児の様子	全体の様子
キーワードを手がかりにして自分の考えを2通りかくことができた。	表や式だけでなく、理由を自分の言葉で書くことができた。	ほとんどの児童がキーワードを生かして、複数の考えをかくことができた。

(3)「思考し、表現する力」の実態調査の変容

年	A	B	C	単元名	調査時期
1年	3人	8人	12人	たしざん(1)	7月
	6人	14人	3人	20より大きい数	2月
2年	4人	24人	6人	計算のしかたを考えよう	4月
	26人	7人	1人	かけ算(3)	12月
3年	6人	11人	4人	かけ算	6月
	22人	0人	0人	小数のたし算	12月
	4人	15人	2人	たし算とひき算	6月
	19人	2人	0人	小数のひき算	12月
4年	4人	9人	8人	式と計算	9月
	16人	3人	1人	分数(3)	1月
5年	5人	13人	7人	倍数と約数	9月
	13人	7人	5人	割合とグラフ	1月

6年	6人 14人	8人 5人	4人 1人	並べ方と組み合わせ方 比例と反比例	9月 2月
	4人 10人	11人 7人	3人 1人	円の面積 比例と反比例	7月 1月
全体	32人 113人	90人 38人	38人 7人		

※A・・・学年に応じた具体的な姿に達している

B・・・自分の考えを1つはかき表している。

C・・・自分の考えをかき表すことができない。もしくは途中である。

9 成果と課題

(1) 仮説1について

思考力・表現力に関する実態調査から、自分の考えを二通り以上かき表すことができる児童は約3倍に増えた。また、授業実践での抽出児及び全体の変容からは、全校で統一した日常実践の取組や、算数だけでなく他教科を含めた4つの学習プロセスを生かしたかく指導の積み重ねが、「思考力・表現力の向上」に一定の成果を上げたことを確認することができた。また、学習への姿勢を確立していく生活全般への指導を並行して行ったことも成果に繋がったと考える。

児童一人一人が自分の考えをノートにかき表し、思考力を高めることができる4つの学習プロセスに沿った算数的活動の工夫は、次のようなものである。

- ・4つの学習プロセスに沿った学習の進め方やノート作りの指導
- ・動作化や半具体物の操作を取り入れた算数的活動
- ・液量図やテープ図を用いてかき表す算数的活動
- ・関心の高い身近な体験を素材にした算数的活動
- ・視聴覚機器等を活用し、視覚化した算数的活動
- ・実物を提示した算数的活動

学習問題やまとめについて話し合う場面で、児童一人一人がより主体的に主体的に話し合いに参加できる発問の工夫や友だちの考えの良さに気づく聞く力を育てる工夫については、今後の課題である。また、算数を苦手とする児童は少なくなく、学習内容の理解を深める手立てについて更に検討していく必要がある。

(2) 仮説2について

児童一人一人が主体的に学び、基礎的な学力を身に付けるために、本校でのUDを取り入れた支援・指導の工夫とは、次のようなものである。これらの手立てをすることで、児童一人一人が自分の考えを言葉や図などで表現することができるとわかった。

4つのプロセスにおけるUDを取り入れた工夫

	焦点化	視覚化	共有化
見出す	大型ブロックの提示 具体物と液量図の提示 児童の言葉から学習問題を作る 素材文の一部を隠す 必要な所に線を引く 学習のめあてを確認し ノートに書く 実物の提示	場面絵の提示 板書とノートの構造化 学習計画表の提示 素材文を書く・貼る ノート指導のパターン化 ヒントカード 解決方法の提示 キーワードの掲示	既習事項の提示 既習事項の振り返り 解決方法の提示 ペアで自分の考えを伝え合う 自分以外の考えを説明させるグループ同士での話し合い 視聴覚機器の活用
調べる	解決方法の提示 キーワードの掲示	既習事項の掲示 ワークシート ブロック操作	
深める		似ている考えをつなげる 小黒板を用いた発表	
まとめあげる			

(3) 児童生活アンケートより

	26年度	27年度
授業内容についていける	78%	89%
自分の考えを発表できる	66%	71%
授業が楽しい	82%	86%

全児童に実施している学校生活アンケートでは、「授業についていける」「自分の考えを発表できる」「授業が楽しい」と感じる児童が増えている。学習プロセスの統一、思考力・表現力を育てるための指導方法の工夫等が、学習への意欲の向上に有効だったと考えられる。また、UDの考え方に沿って、落ち着いて学習に集中できるような整然とした物的環境を整えることや、学習への意欲を高める教師の温かな視線や言葉かけ、さらには、資料作りの工夫、安心して意見を出し合える学級内の人間関係に注力してきたことがアンケート結果につながっていると考えられる。また、これらの取組による教職員の教材づくりへの意識の変化や特別支援教育についての理解の深まりが大きな成果であった。一方、アセスメントシートを生かしての児童の実態把握や授業のユニバーサルデザイン化については始まったばかりであり、実践の積み重ねはこれからである。児童一人一人が「わかる」「できる」指導方法の改善について、さらに実践を積み重ね、児童一人一人の思考力・表現力の向上に繋げていきたい。

悩みを抱える児童を支援する校内体制づくりについての研究

～総合的・一体的に児童を見守り支援する校内体制づくりへの取り組み～

千葉市立松ヶ丘小学校

校長 川 邊 敏 明

I はじめに

本校は、千葉市中央区の内陸に位置し、近くには京葉道路松ヶ丘ICがあり交通量は多いが、緑地帯も多く自然も豊かである。児童の家庭環境も会社員の保護者が多く、経済的にも比較的安定している。学級数は特別支援学級を含めて18学級の規模であり、330名の児童数を有している。特徴としては、特別支援学級として言語指導教室を設置している。また、地域活動も盛んであり、近くには看護系、福祉系の大学、国立病院等の施設もある。



このような環境を基盤に「よく考え、やさしく、たくましく」を教育目標として、自ら学び、心豊かでたくましい児童の育成に努めている。

II 研究の実際

1 研究のねらい

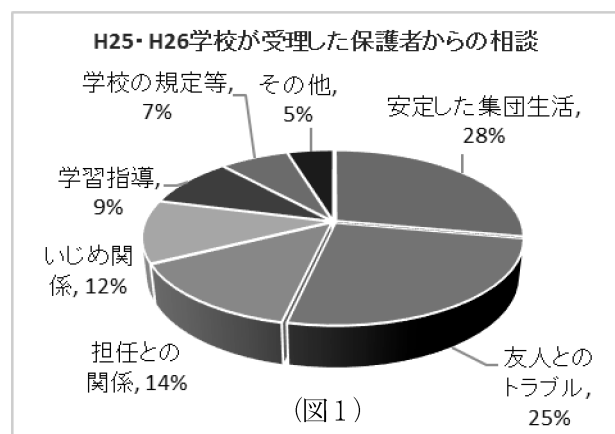
現在、学校現場では発達障害やいじめ、不登校などの生徒指導上の多様な問題への対応が求められているとともに、平成25年度に「いじめ防止対策推進法」が施行された。ますます、児童の特性や児童間の関係性の見極めが重要となり、生徒指導のみの視点だけでは、児童の問題行動等への対応は難しい現状にあると言える。よって、全校を挙げて計画的、組織的に児童と向き合う支援体制が必要である。

そこで、本校においても生徒指導と特別支援教育、教育相談の担当がチームを組み、「ふれあい部会」という組織を平成24年度より立ち上げた。しかし、毎年20件を超える保護者からの相談が学校に寄せられ、対応に追われる状況にあり、「ふれあい部会」の組織機能が十分に果たされていない現状にあった。その課題を分析し、児童支援の過程を見直して意図的、継続的、効率的に組織と体制が機能する計画を立て、実践につなげていきたいと考えた。

2 「ふれあい部会」が抱える課題

(1) 協力体制に関する課題

平成25年と26年の2年間に学校が受理した保護者からの相談件数は43件と多く、その相談内容の内訳は、図1に示した通り、人間関係に関する相談が8割を占めていた。児童と児童、児童と保護者、保護者と保護者の間に入っでの調整と対応に、生徒指導・特別支援教育・教育相談の担当ごとに追われ、「ふれあい部会」では、チームとしての機能が十分に果たせない現状となっていた。また、悩みを抱える児童への支援人員の不足や関係機関等との連携不足も機能不全を生じさせる要因となった。



(2) 方針と役割に関する課題

支援を要する児童のために設置した「ふれあい部会」の当初の方針は、「気になる子」として情報提供のあった「集団生活が苦手な児童」「特別支援教育が必要だと思われる児童」「パニック状態が収まらない児童」「いじめを受けたと思われる児童」への支援対策を、校長・教頭・教務主任・生徒指導主任・特別支援教育コーディネーター・教育相談担当・養護教諭・学年主任及び担任のメンバー構成によって協議し対応することとなっていた。しかし、何を拠り所に対応すればよいのか、また、教職員はどのような役割を担えばよいのかといった方針が示されていなかった。そのため、悩みを抱える児童への支援を言語指導教室担任の校内支援に頼ることが多くなってしまい、ケース会議の機会がなかなか持てず、支援策の見直しや情報共有が図れないといった課題が生じた。

3 課題解決に向けた取り組み

(1) 方針の見直しと支援フローの確立

抱えていた課題改善の視点を次の4点に絞った。

- 「気になる子」の見守りと寄り添う体制の明確化
- 悩みを持つ児童への支援の過程と役割の明確化
- 「判断」「評価」を通じた継続的な対応の重視
- 地域・保護者・関係機関等との連携の重視

上記の内容を、方針として分かりやすい表現にまとめ、児童支援の過程をフロー図に示し(図2)、4月に全教職員に説明して共通理解を図った。

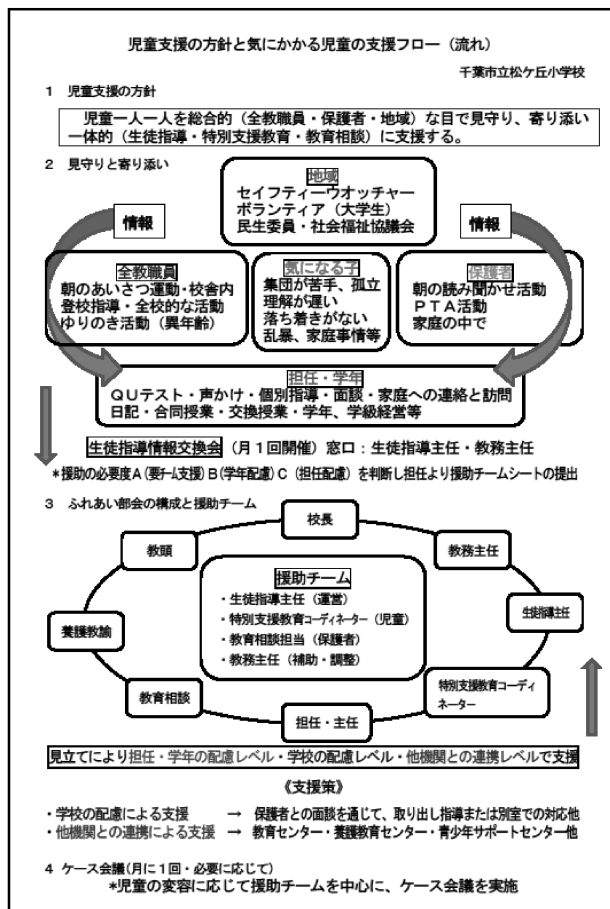


図2

(2) 児童支援の実践

全教職員に加え、保護者や地域の見守りからも「気になる子」に気付いてもらうことが必要であるとし、その窓口を教頭、関係機関等への依頼や連絡は校長、支援が必要になった場合の「ふれあい部会」の運営は生徒指導主任と教務主任が担当する役割を明確にした。児童の見守りは、子供たちが登校する時間帯から始まり、「気になる子」の現れがないか、地域と教職員による登校指導や児童会活動による「朝のあいさつ運動」(写真1)、昇降口では用務担当職員が見守るといった児童が教室に入るまでのセイフティーネットを敷く中

での見守りを強化した。また、「気になる子」を見かけたときは、進んで声をかけ寄り添うようにした。



(写真1)

学習時間は、担任に加えボランティアの方々にも協力してもらい、より多くの目で児童を見守り、寄り添えるよう人員の充実を図った。ボランティアに関しては、教育委員会による大学生ボランティア派遣事業やNPO法人による指導員派遣事業を活用するとともに、学校独自で近隣の福祉系大学に協力を依頼し、年間7名の大学生ボランティア(写真2)に「気になる子」の学級を中心に学習補助や児童との遊びの中で、見守ってもらうようにした。また、Q Uテストの活用や



(写真2)

年2回のいじめ調査を通じて、細目に児童間の人間関係を見守ることができるよう留意した。

見守る中で、担任が「気になる子」の様子に不安を感じた場合は、月に1回実施の生徒指導情報交換会において状況を報告し、支援の必要度に応じて援助チームシート(図3)を教務主任宛に提出することとした。

援助チームシート H27

氏名	学年・組	記入者	A	B	C	No.
学習・生活・行動の状況			月		日記入	
			家庭の状況			

(図3)

援助チームシートによりA段階「要チーム支援」と記載のあった「気になる子」については、悩みを抱える児童として背景と要因について援助チームが中心となり「ふれあい部会」で見立てて支援策を練るようにした。その際には、下記に示した支援レベルの表（図4）を活用して判断するようにした。

児童が抱える悩みに応じた支援レベル	
①担任・学年のレベルでの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・個別指導及び面談・家庭訪問・保護者との連携 ・観察と継続的な寄り添い・学年全体の取り組み
②学校レベルでの配慮	<ul style="list-style-type: none"> ・ボランティア（大学生含）の重点配置 ・居場所の工夫 ・別室での個別指導（保護者の承諾が必要） ・教育相談担当との面談 ・校長、教頭を交えた面談
③他機関との連携	<ul style="list-style-type: none"> ・中学校スクールカウンセラーとの連携 ・教育委員会等の相談機関との連携 ・児童福祉関係の相談機関との連携 ・警察関係の相談機関との連携
④その他	<ul style="list-style-type: none"> ・民生委員、地区の社会福祉協議会との連携 ・地域コミュニティ施設「ひだまり」との連携 ・保護者、PTAとの連携 他

（図4）

協議した支援策の効果の確認と処置のために、援助チーム（生徒指導主任、特別支援コーディネーター、教育相談担当、教務主任）と学年・担任が協力し、児童や保護者との面談や観察を通じた状況を整理して、支援レベルを上げるか下げるかのケース会議を月1回実施した。また、必要に応じた実施も可能とした。

4 悩みを抱える児童の支援事例

（1）居場所を工夫することでの支援

A児は、かかり付けの医師と定期的に相談を重ねている児童である。相手の立場や状況を自力で判断し理解することが苦手なため、学級集団の中での生活のしづらさを感じる悩みを抱えていた。また、友人との諍いも絶えず、いじめを訴える状況になり、進級してからすぐに不登校が続いた。「ふれあい部会」では、学校

の配慮としてA児の居場所を確保する工夫が必要であることを判断し、保護者との面談を通じて、次のような支援策を実践した。

- ①時間をずらしての登下校
- ②言語指導教室の相談ルームを居場所の拠点とする。
- ③得意な理科を中心とした学習プログラムを組む。
- ④教頭と教務主任が週2時間程度の理科学習を担当
- ⑤用務担当職員と学校園にて野菜を育てる。
- ⑥事務室、保健室も居場所として迎え入れる。
- ⑦言語指導教室担任と割り当て教員により個別学習

（写真3）



別室での個別学習の様子
（写真3）

この実践を積み重ね、定例のケース会議にて支援策を振り返り、修正を図っていったこと、またその経緯を保護者に伝えていったことで、7月までの長欠状態が解消され、表情も豊かになった。9月から翌年3月までは病欠以外の欠席はなくなった。

（2）他機関と連携しながらの支援

B児は、7月までは無欠席の状態にあった。しかし、夏季休業後の9月より不登校が始まった。担任が家庭を訪問すると保護者から離れたくないと訴え、不安がる状況になっていた。保護者もストレスを抱え、話を聞いてくれる相談相手を欲していたことにより、次のような支援策を実践した。

- ①教育センターの教育相談を紹介
- ②教育センターの家庭訪問相談員を要請
- ③発達検査を実施し教育センターと情報共有で連携
- ④午前中は保護者同伴でB児を言語指導教室に通級
- ⑤主に教育相談担当が保護者とB児の相談相手

この支援を通じ、B児と保護者の心のケア並びに児童への個別の学習指導を継続して実施した。また、教育センターから週1回家庭に訪問する相談員からの情報も分析し、ケース会議の判断によって、保護者とB児とが共にいる時間を減らし、B児が学級に戻る時間を増やしていった。翌年1月からは、自ら本来の学級に戻って過ごすことが多くなり、3月には保護者に頼ることなく1人で通学並びに学級での生活が送れるようになった。

(3) 担任・学年の配慮を中心とした支援

C児は、学習の準備や整理整頓が苦手で、周囲からの注意をよく受けていた。その悩みとストレスを他者へのいたずら行為に移し返している様子が、以前から伺えた。そうした行為に、担任は寄り添いながら指導を続けていた。9月末に、学校宛に保護者よりいじめ被害の相談を受けた。年2回実施するいじめ調査の1回目の時期でもあったので、早急に調査を全児童と保護者に実施した。その結果の分析から、いじめの実態が確認された。よって「ふれあい部会」の実施により、次のような支援策を実践した。

- ①被害児童への寄り添いと集団指導、ボランティアの配置
- ②受容と傾聴による担任の個別指導と面談の継続
- ③保護者との面談を学年主任も交えて実施
- ④学年合同で、体育と総合的な学習の時間を実施
- ⑤週1時間は教務主任が道徳を別室にて個別指導
- ⑥実態調査シート、QUテストの実施と分析

C児は、当初いたずら行為としか認識しておらず、いじめの実態についての理解が本人と保護者に受け容れられない状況にあった。しかし、粘り強く担任と学年主任が面談を繰り返す中で、個別による指導の必要性を感じてくれるようになり、教務主任による別室での道徳の個別指導が継続して行えるようになった。コミュニケーション能力に欠けている実態調査の課題から、ロールプレイによる相手の気持ちを理解する指導を中心に対応を続けた。また、1回目のいじめ調査の結果概要を全保護者に知らせることで、学校としてのいじめへの対応姿勢を示した(図5)。2回目のQUテストを12月に実施した結果、学校生活に満足している気持ちへと移り変わってきている状況が確認できた。2月に実施した2回目のいじめ調査結果においては、いじめへの不安を訴える回答が見られなくなった。

5 成果と課題


悩みを抱える児童への支援体制を見直し、方針、体制、支援フローの共通理解を図ったことは、継続的な児童支援の取り組みにつながったとともに、教職員の協力意識も高まった。また、各種調査の結果の分析やケース会議の経緯等を支援児童の保護者に前向きに伝えていったこと、大学生のボランティアを独自に依頼し、見守りと寄り添いの人員を厚くしたこと、他機関連携を積極的に行ってきたことが、学校への信頼度を測る学校評価の向上につながった。支援策の判断基準

を設けたことは、「ふれあい部会」や「ケース会議」における対応策の適確性と効率化につながった。


以上のように多くの目で見守り、生徒指導、特別支援教育、教育相談が一体となって継続的・効率的に支援する体制づくりの努力は、支援した児童の日常と笑顔を取り戻す成果につながった。

しかしながら、多忙な業務の合間をぬって支援を図る教職員の負担や複雑なケースへの対応、専門性を補う研修の必要性といった点については今後の課題として残った。

平成 27年度 学校だより11月号

 まつがおか

千葉市立松ヶ丘小学校



「いじめについての調査」を終えて


校長 川邊 敏明

9月25日に学業中間期として「いじめについての調査」を保護者の皆様、子どもたちを対象に実施をさせていただきました。ご協力いただきましたことに、心より感謝申し上げます。

特に、10月からは陸上大会や球技大会の練習、校外学習、まちづくりクリーン活動、学習発表会、元氣キャンプ等の学校や学年の全体行事が目白押しに予定され、学校自体も忙しさを増す時期でもあります。そうした時期を迎える前に、子どもたちの「心の声」をしっかりと受け止める機会を持つことを目的として、今回実施をさせていただきました。状況並びに学校対応の考え方と具体的な行動等について下記にてお知らせをいたします。

記

- 集計の状況について
回答なしの方、「特になし」と回答した方が多数を占めていたが、いじめについて不安を抱えている回答もあった。
- 学校対応の考え方と具体的な行動等について
 - 考え方について
 - 何でも受け入れ、周囲の状況に順応したり、模倣したり、良くも悪くも傾きやすい傾向にある子どもの発達を踏まえ、課題が生じている子ども達の「心の声」を傾聴し、子どもの人格を尊重しながら指導にあたることもに居場所づくりに努める。
 - 「いじめ防止対策推進法」では、地域や家庭との連携の必要性が説かれていることを踏まえ、保護者と連携していくとともに事案の状況に応じて地域との協力関係も築きながら対応する。
 - 具体的な行動について
 - 校内委員会「ふれあい部会」を開催し、対応を要する回答書についての分析
 - 緊急性、継続性を要する回答書の実効策について協議し、段階を踏まえて対応
 - 担任や学年による配慮での対応
 - 学校による配慮での対応段階
 - 他機関との連携による対応段階



ともだち

(図5)

III おわりに

この研究を通じて、悩みを抱える児童への支援を図るためには、児童を見守り、寄り添う教職員の心がけと結束力、そして困難が生じた時の判断や関係機関との連携を率先して行う等の校長のリーダーシップがとても重要であることが痛感させられた。

ますます多様化が進み共生が求められる社会の中、教師単独で悩みを抱える児童を対応することは難しくなる。学校運営の安定を支える中核として、継続的・効率的に児童を支援する校内組織と体制の重要性は、今後さらに増してくると感じた。

自己を見つめ、思いや考えを豊かに表現する児童の育成

～「MY随筆集」づくりを通して～

千葉市立検見川小学校

教諭 安 部 功 貴

1 問題の所在

文章を書く活動に際して、「思いが浮かばない」「考えを持ってない」「気持ちをどのような言葉で表せばよいかわからない」などは、児童の実態として多く挙げられる課題である。

本研究で取り組む随筆には、体験活動や児童にとって身近なことから素材を設定し、読み手を意識して自由に思いや考えを綴っていくことができるという特徴がある。随筆を書くことを通して、経験をもとに自分を見つめ直し、その時の様子や思いを読み手に伝わるように言葉を吟味して使う力を養うことができる。

「作文を書くことに対する関心・意欲」、「自分を見つめた経験・よさ」について、第6学年児童 30 名を対象に事前調査を行った。その結果、「関心・意欲」については、書くことに対しての抵抗がある児童は 52% を占めた。理由としては、書き出しや表現する言葉、効果的な構成（組み立て）がわからないというものだった。「自分を見つめた経験・よさ」については、見つめることのよさに気づき、どのように成長したのか等具体的な記述ができた児童は 30% であった。また、平成 27 年度全国学力・学習状況調査の意識調査の結果から、児童の自己肯定感が全国に比べ低いという実態も浮き彫りになった。（自校 65.5%：全国 76.4%）

以上のことから、児童は、日々の学習や活動を振り返り自分を見つめる経験が少なく、その価値を実感できていないことが分かった。また、様々な経験したことや感じたことを具体的に自分の言葉で表現していく語彙力や表現力が弱いということも見えてきた。「書くこと」は自分自身と対話し、考えを整理して深めていくことである。最高学年としてのこの1年で、そのよさや楽しさに気付かせたいと考えた。

そこで本研究では、随筆を書くことを通して児童が自分を見つめ、言葉を大切に豊かに思いや考えを表現できるような指導の在り方を追究したいと考えた。

2 研究の目的と方法

(1)研究の目的

随筆を書くことを通して、自分のものの見方や考え、感じ方などを見つめ直し、豊かに思いを表現する児童を育成する指導の在り方を提言するために、本研究を行うものである。

(2)研究の方法

「MY 随筆集」づくりをするという言語活動を設定し、児童に学習の見通しをもたせた。本研究では、随筆を書く際に俳句・短歌を活用し、その世界を広げることで随筆へとつなげたいと考えた。また、他教科・領域との関連や並行・継続した取組も行った。

3 研究の内容

(1)随筆を書く時期とテーマ設定の工夫

自分を見つめるためには、節目が重要になる。そこで書くタイミングとして、「四季」と「学校行事」、締めくくりとして「卒業文集」を設定した。

四季は「春はあけぼの」で書かれているように、日本人として意識し大切にしたい感覚であり、一つの節目にもなる。また、大きな行事である農山村留学や陸上大会、球技大会、「6年生を送る会」の後にも随筆に取り組むこととした。行事を通して、学ぶこと・成長すること・考えが深まることに気付かせたいと考えた。

テーマ設定も「〇〇と自分」とし、常に自分との関わりや意味を意識させた。

(2)俳句・短歌の活用

俳句や短歌で表現することは、様々な思いや世界を限られた字数にまとめる活動である。そこで、その思考の逆をたどり、世界を広げたいと考えた。

1つのテーマでも何句（首）か作成させ、最も世界を膨らませられそうなものを選ばせた。表現したいこととして「学んだこと・変わったこと・成長したこと・自分なりの見方・考え方の深まり」の観点を示し、さらに、「伝えたいこと」も明確にさせた。

〔資料1〕のように、歌の世界を広げる際、「五感+心」を柱にして行った。付箋紙に記述させ、後の構成メモ

づくりにも活用できるようにした。

〔資料1〕俳句・短歌を活用した思い出シート

(3)読み手を意識した学習活動の工夫

①詩や俳句の技法の活用

随筆では、自分なりの思いや考えを綴るのみならず、読み手を意識してまとめることも必要である。読み手に興味を持たせたり、自分の表現したい心情や様子にあった描写をしたりしていくために、詩や俳句を書く際に用いられる技法を応用したいと考えた。

ア 紹介したレトリック

- ・ 比喻 ・ 擬人法 ・ 対句 ・ 反復 ・ 倒置法
- ・ 擬態、擬音、擬声語 ・ 体言止め ・ 会話 ・ 数字

「レトリック」とは、巧みな表現をするための技法と本研究では捉える。様々なレトリックやその効果を知ることには終始するのではなく、随筆を書く時に活用できることが重要である。そこで、比喻・擬態語・擬音語等、よく使われるレトリックに絞り、以下イ、ウの順で展開し、意識して使う力の育成をねらった。

イ 文章を比較し効果と名前を把握する

〔資料2〕のように、二つの文を比較しどこにレトリックが使われているか明確にした(傍線部)。その後、レトリックの効果と名前を合わせて確認した。

〔資料2〕レトリックを把握させるための例文

ウ 絵の世界をレトリックを用いて説明する



比喻は1ポイント、擬音・擬態語は2ポイントなど、楽しみながら取り組み、レトリックの活用を図った(〔資料3〕・〔資料4〕)。

〔資料3〕レトリックを用いる説明に使用した絵の例

- ・ 化け物のような大きな波がザッパーンと打ち寄せてきた。
- ・ どんよりとした雲から生温かい風がビューツとふき、バタバタと服をなびかせた。

〔資料4〕児童の作品で使われたレトリック

エ 書き出しの工夫

〔資料5〕のように書き出しのパターンを紹介し、読み手をひきつける工夫を確認した。

紹介したパターンは「自分の体験・会話・音・時刻や時間・問いかけ・考えや感想・引用や伝聞・回想シーン」である。パターンとともに、それぞれの効果や他の随筆作品での使われ方も確認し、より実用的になるように配慮した。

自分の体験から

笑えない失敗。鍵を家に忘れ、自分で自分を閉め出してしまった。

会話から

「どうしたの。」と友達が私に話しかけた。

問いかけから

「協力」の本当の力を知っていますか。

〔資料5〕紹介した書き出しのパターン例

(4)構成における工夫

①随筆を比較し効果的な構成を探る

教科書に掲載の「薫風」「迷う」「春はあけぼの」は読み手をひきつける優れた随筆である。これらを用いて、「事実…事」「思い…考え…思」、「伝えたいこと…伝」の柱で構成の例を確認した。「はじめ・中・終わり」の3部構成でとらえた場合、どこにどのようなことが書かれているのかまとめ、〔表1〕のような構成の例を作った。

作品	はじめ	中	終わり
薫風	伝	事 思	伝
迷う	事	事 思	伝
春はあけぼの	伝	事 思	事 思

〔表1〕作品の構成表

表現する語彙が少ないことが分かった。そこで、言葉をプラス・マイナスの感情に分類して「気持ちを表す言葉リスト」〔資料 10〕を作成した。リスト中の感情の時に自分がとる言動についても集約し「気持ちと言動の対応表」〔資料 11〕も作成し活用を図った。

自分の気持ちに合った言葉を選んで使おう

プラスの感情

- ・うれしい 喜ぶ 歡ぶ 喜ばしい 歡迎
- ・ほがらか 明るい ざわやか すっきり 心地よい
- ・好感が持てる 気分がいい 楽しい 愉快
- ・意欲的 意欲がわく 元気 強気 勝ち気
- ・努力 一所懸命 (一生懸命) 夢中 集中
- ・ほっとする 安心 安らぐ おだやか おお
- ・誇らしい 誇らしげ となつかしい なつか

マイナスの感情

- ・悲しい もの悲しい 苦しい 心苦しい つらい
- ・さびしい ものさびしい 心細い

その感情の時、どのような言葉
行動をとりますか？

気持ちを表す言葉を紹介し、その気持ちの時に
とる言動を想像させ
記述させた。

〔資料 10〕気持ちを表す言葉リスト

気持ちと言動・出る言葉

プラスの感情

○鼓動がスキップしている・おどる
る・周りのことを気にせずとにかく進みたい (気分がいい)
○ホワーっとする (ほっとする) ○笑顔になる (楽しい)
○目がきらきら (願い・望み) ○肩が下がる (安心・安
○笑ってジャンプする (うれしい・喜ぶ・楽しい) ○笑
○皆と楽しく過ごせる・何でも楽しくなる (明るい) ○

気持ちと言動を結び
つけ、随筆に活用で
きるようまとめて提
示した。

〔資料 11〕気持ちと言動の対応表

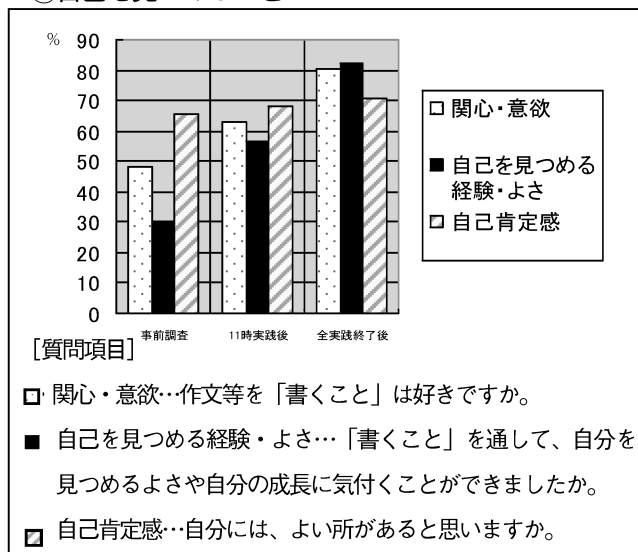
②図書館司書との連携と並行読書

児童は、随筆という文種に慣れていない。書き方のイメージを持ち抵抗を減らすために、図書館司書と連携して読み聞かせに取り組んだ。また、随筆を朝読書や図書の時間等に気軽に読めるよう常時用意した。

4 研究のまとめ

(1) 成果

①自己を見つめること



〔図 1〕児童の意識の変容

〔図 1〕を見ると、書くことに対する「関心・意欲」について「抵抗がほぼなくなった」と回答した児童が 80%、「自分を見つめる経験」について肯定的な回答をした児童が 82%にまで増えた。さらに、自己肯定感も 70%に伸びた。随筆の書き方を理解し、様々な場面で継続的に自己を見つめることや他教科・領域との関連を積極的に図ること、自分の作品が肯定的に認められる場を設定することは有効であると考えられる

②豊かに表現すること

俳句・短歌で表現させ、その世界を「五感+心」で膨らませて随筆につなげた。そのことにより、随筆に活用できる材料が豊富にあるため、随筆を書くことに対する抵抗が減り、生き生きと自分の言葉で思いや考えを伝えることができるようになったと考える。

レトリックや書き出しのパターンを活用し、優れた随筆から構成を学び自分の随筆に生かして、読み手を意識して書くことができた。それらを読み合い、交流する時間を十分に設けることで、互いに学び合いながら、書くことの楽しさを実感させることもできた。

〔資料 12〕と〔資料 13〕を比較して考察すると、書き出し (囲い文字) が自分の思いから始められ、読み手をひきつける工夫が見られるようになっている。気持ちや様子の書き表し方 (下線部) においても、比喩や体言止め等のレトリックを活用して自分の思いを巧みに表現することができるようになっていくことが分かる。

私は珠算塾に通っています。 (中略) 一人でさびしく帰る時、たくさんの家や店の前を通る時、カレーや焼き鳥のにおいがします。なぜか早く家に帰ろうとします。とても不思議です。

〔資料 12〕第 2 時に書いた随筆

「農家は嫌だ。」農山村留学で行った稲刈り体験は夢と現実がわからなくなった。 (中略) 「うっ。」思わずうなってしまった。沼は山蛇のようにまわりついてきた。 (中略) 天候不順で大切に育てた米が不作だったら、今までの苦労が水の泡。農家の方はどう思うだろう。

〔資料 13〕第 10 時に書いた随筆

(2) 課題

身近な出来事や経験をテーマにして取り組んだ。書き易かった反面、生活文の域を超えず、自分の見方や考え方を深め、自分にとっての意味や価値を書くまでに至らない児童がいた。振り返り活動の充実による自己の成長や課題の自覚と、社会的なテーマで書き、視野を広げ様々な事象に対して自分の言葉で表現させる経験を積み重ねていく必要がある。

推論する能力を育てる理科学習

～思考を視覚化し、説明し合う活動を通して～

千葉県立宮崎小学校

教諭 兼 子 稔

1 はじめに

学習指導要領の改訂に伴い、問題解決の能力として6学年では「多面的な追究」から「推論」へと変わった。理科学習における「推論」について、※日置光久氏は「いくつかの前提から結論を導き出すことである。また、事物・現象から見いだした問題に対し、今までの自分の経験や知識を基に推し量り考えること、予想や仮説をつくり出す思考のことである。」と述べている。つまり、理科の問題解決学習における推論とは、既習内容や経験などから予想したり、観察や実験の結果から結論付けたりする能力と捉えることができる。

本学級の児童は、理科の学習に意欲的に取り組むことができる。アンケート調査からも、9割の児童が観察や実験が好きだと答えた。しかし、実験の予想を立てたり、実験結果から結論付けたりすることが苦手だと答えた児童が6割を占めていた。その理由として「早く結果が知りたい。」「予想がはずれるのが嫌だ。」などの意見が多かった。また、実験では自分の予想が当たったか否かに関心が向けられているため、予想と異なった結果が出ると実験結果から結論づけることができない児童も多かった。

そこで、実験を行う前に考えられる結果を複数想定したり、結果から言えることを考えたりするなど、見通しを持った問題解決を通して、児童の推論する能力を育てたいと考えた。また、推論したことを伝え合う活動を通して、自分と友達の考えの共通点や相違点に気づき、自らの考えを追加・修正しながら、よりよい考えに高めていけるようにしたいと考えた。

学習指導要領の理科内容区分「A物質・エネルギー」では、粒子やエネルギーなどの目に見えないものを扱う。そのため、これまで粒子やエネルギーのイメージがあいまいで推論や表現することが苦手な児童が多かった。そこで6学年「水溶液の性質」では、推論する場面で絵や

図、立体モデルなどを活用しながら、思考を視覚化する実践を行った。そして、推論したことをより妥当性の高いものに練り上げるための話し合い活動を取り入れた。

2 実践の内容

(1) 単元について

学習指導要領の改訂により、系統性がより一層重視されるようになった。「水溶液の性質」は中学校の化学変化の学習につながる単元である。中学校では目に見えない現象を論理的に説明する化学の分野に、苦手意識をもつ生徒が多い。小学校段階で粒子と粒子の結びつきについて理解を深めることで、中学校での化学変化に対する苦手意識を改善したいと考えた。本単元について、学習指導要領には「水溶液には金属と触れ合うと金属を変化させるものがあることをとらえるようにする。」と記されている。また、大日本図書発行の教科書では金属を変化させる水溶液について、塩酸とアルミニウムを例に実験が紹介されている。本学級の児童は、塩酸にアルミニウムを溶かすと、アルミニウムが別の物に変化すると結論付けることができた。しかし、アルミニウムが別の物に変化したことを、アルミニウムと塩酸の結びつきとして捉えている児童は1割にも満たなかった。そこで、粒子と粒子の結びつきについての理解を深めるために「塩酸に溶けた金属がどのように別のものに変化したのか」について推論する学習を行った。

(2) 推論したことを表現することで、より妥当性の高い予想に絞り込む

① 絵や図の活用により思考の視覚化を図る

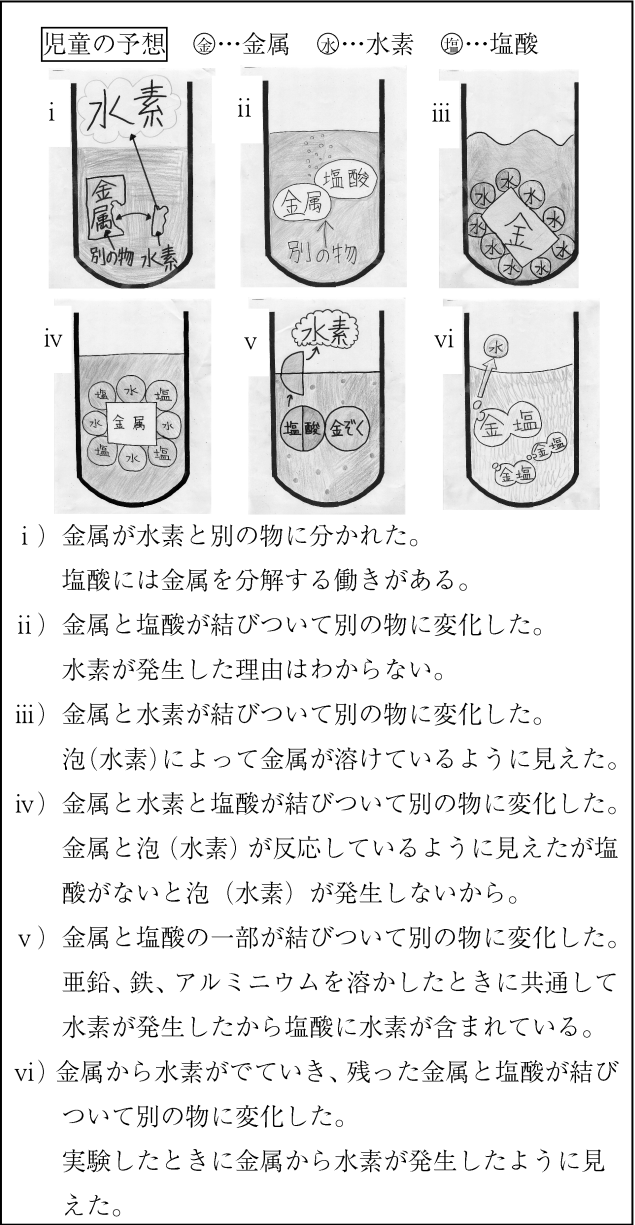
はじめに、前時までの学習を振り返った。

- (ア)亜鉛・鉄・アルミニウムを塩酸に溶かしたときに共通して水素が発生した。

(イ)どの金属も別の物に変化した。

(ウ)「水素が発生したこと」と「金属が別の物に変化したこと」は同時に起きている。

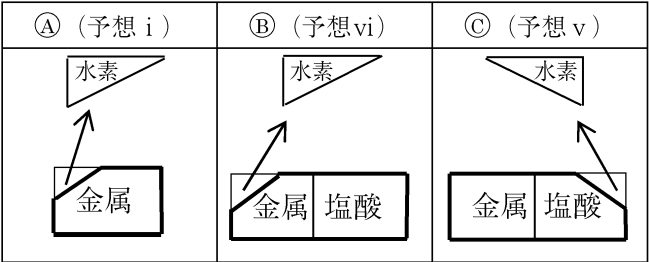
これらの事実を基に、児童は自分なりに「塩酸に溶けた金属がどのように別の物に変化したのか」について推論した。しかし、自分が推論したことを言葉だけで友達に伝えることは難しかった。そこで、自分の考えを絵や図に表現し、それらを示しながら説明し合う活動を取り入れた。その結果、お互いの考えを理解することができ、【図1】のように粒子と粒子の結びつきを視点に予想を分類整理することができた。



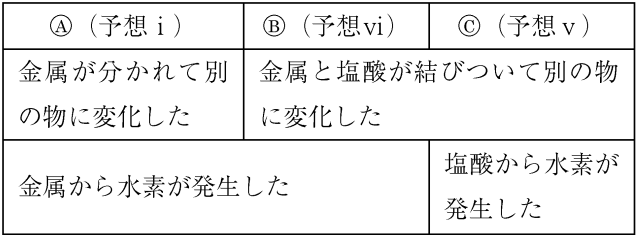
【図1】 児童の予想

6つの予想の中で、話し合いの視点となったのが「水素」の存在である。「水素はどうして発生したのか」「水素はどこから発生したのか」について話し合いを進めた。試験管の中には金属と塩酸しかないことから、児童は「金属が塩酸

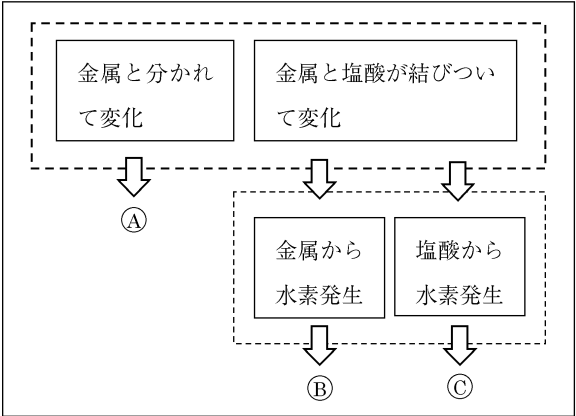
のどちらかに水素のもとになる材料があるはずだ。」と考えた。そして、水素の存在が明確に示されていた i、v、vi の3つの予想が妥当であると考えた。しかし、3つの予想の共通点や相違点に気付いている児童は少なかった。そこで児童の予想を教師が【図2】のようにまとめ、提示した。教師が予想を整理したことで児童は、【図3】のようにそれぞれの考えの共通点や相違点に気付くことができた。また、【図3】を基に問題解決の見通しを話し合い、【図4】のような手順で追究する計画を立てた。



【図2】 児童の予想を教師が図にまとめた図



【図3】 児童の予想の共通点や相違点を整理した図

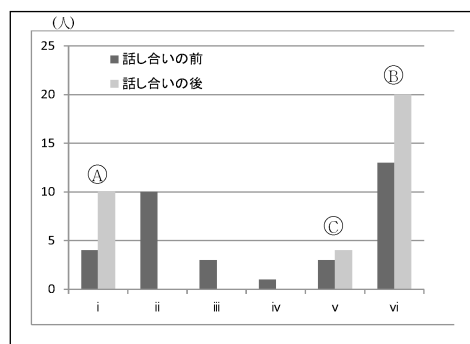


【図4】 問題解決の見通し

② 児童の変容

【表1】からわかるように、推論したことを絵や図で表現したことで、水素の存在に気付き児童はより妥当性の高い思考に変容した。

【表1】 i～viの予想に対する妥当性の変化



(それぞれの予想が妥当だと考えた児童の人数)

(3) 金属が別の物に変化した時の重さの変化を考える。

①立体モデル（粘土）の活用

図2と図3を基に、予想を検証するための実験方法を話し合った。

「金属が結びついたり、分かれたりして別の物に変化するなら重さが変わるはずだよ。」

「金属が別の物に変化したときの重さの変化を調べれば、どの考えが正しいかわかるかもしれないね。」

「金属は別の物に変化すると重くなるのかな。軽くなるのかな。」

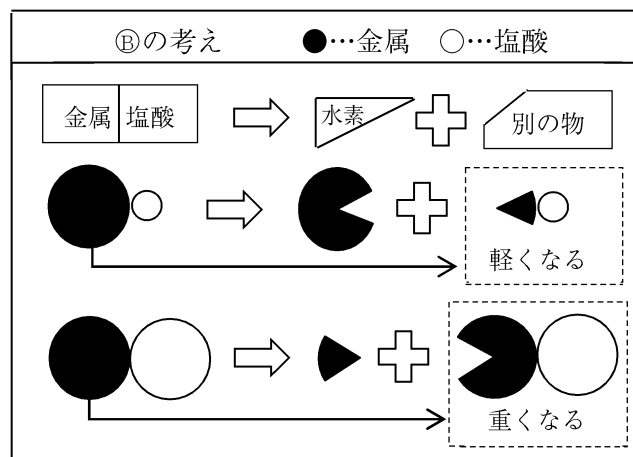
「④は金属から水素が発生するから、別の物に変化したら水素の分だけ軽くなるね。」

「⑤は塩酸から水素が発生するから軽くなるのかな。でも、金属はそのままだから別の物に変化すると重くなるのかも…。」

「⑥は…」 (児童の話し合いより)

9割の児童は、⑥や⑤と考えた時の金属の重さの変化がわからなかった。また、重さの変化がわかった児童の説明を聞いても8割の児童は理解することができなかった。これは粒子と粒子の結合に関して、図だけでは量感をイメージすることができなかったからだと考えられる。そこで、立体モデル（粘土）を操作しながら重さの変化を考える活動を取り入れた。黒い粘土を金属、白い粘土を塩酸とした。児童は、粘土をくっつけたり離したりしながら重さの変化を考えた。そして、それぞれの予想について自分の考えを説明し合った。⑤は金属と塩酸の一部が結びついて別の物に変化することから「重くなる」ことがわかった。しかし、⑥は重くなる

という考えと軽くなるという考えの二通りあった。説明し合っていく中で、【図4】のように金属から出ていく水素の重さと金属と結びつく塩酸の重さによって重くなったり軽くなったりすることがわかった。



【図4】 金属が別の物に変化したときの重さの変化
話し合いの結果は次の通りである。

④…軽くなる

⑥…重くなるかもしれないし、軽くなるかもしれない

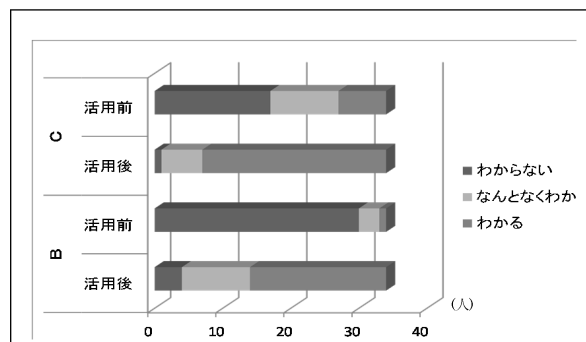
⑤…重くなる

この後、金属が別の物に変化したときの重さの変化を調べる実験を行った。その結果、金属と別の物の重さを比べると別の物の方が「重くなる」ことが分かり、児童は⑥と⑤の考えに絞り込むことができた。

②児童の変容

【表2】からわかるように多くの児童は、立体モデル（粘土）を操作することで粒子が結びついたり、分かれたりしたときの重さの変化を理解できるようになった。

【表2】 金属が変化したときの重さの変化の理解度



(4) 水素が金属と塩酸のどちらに含まれているのか調べる。

③と④のどちらの考えが正しいのかを調べるために、水素が金属から発生したのか、塩酸から発生したのかについて調べた。実際に金属が塩酸に溶ける様子を観察しても、金属の表面(塩酸と金属の境目)から水素が発生していることから、水素が塩酸から発生しているのか金属から発生しているのかはわからなかった。そこで、金属に水素が含まれているのか、塩酸に水素が含まれているかを調べることにした。34名中30名の児童は、金属中に水素が含まれていると考えていた。そのため、始めに金属中に水素が含まれているかどうかを調べることにした。児童は、アルミニウムに含まれている水素を取り出すために以下のような実験方法を考えた。

- ・水の中にアルミニウムを入れ、はさみで切った時に発生する気体に着火する。
- ・アルミニウムを火で燃やし、発生する気体に着火する。

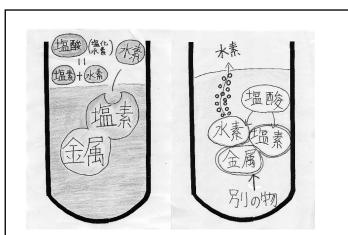
しかし、これらの実験で水素が発生することはなかった。実験結果から児童は塩酸の中に水素が含まれているのではないかと考えるようになった。塩酸の中に水素が含まれていると考えた児童は、塩酸は塩化水素という気体が溶けていることから「どうにかして塩化水素の水素だけを取り出したい。」と発表した。児童の知識では塩酸から水素を取り出す方法を考えることができないので、教師が塩酸の電気分解装置を提示した。電気分解の結果、塩酸から「塩素」と「水素」が発生することがわかった。このことから、児童は塩酸に金属が溶けたときに発生する水素は塩酸から発生していると結論付けた。

(5) 実験結果から結論づける

①考察したことを絵や図で表現し、説明し合う。
実験結果

- ・金属が別の物に変わると重くなった
- ・塩酸を電気分解すると水素と塩素が発生した

児童は、予想③の考えが事実合っていると考察した。そこで、予想③の考えと実験結果をもとに、もう一度図に表現させた。



【図5】実験結果から考察した図

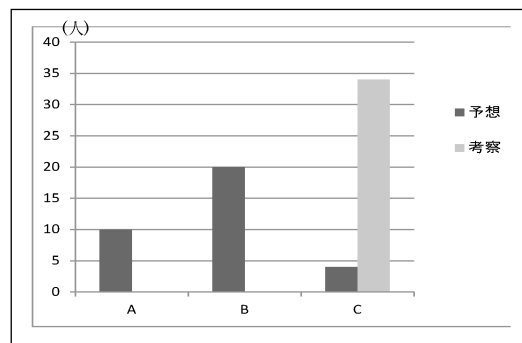
児童は予想と実験結果を関係付けながら、【図5】のように表現し、以下のように結論付けた。

塩酸の塩素と金属が結びついて別の物に変化した

③ 児童の変容

予想と考察を比べると【表3】のように③の考えが妥当であると結論づける変容があった。

【表3】予想と考察の妥当性の変化



3 成果と今後の課題

- 絵や図、立体モデルを使って児童の思考を視覚化したことで、あいまいだったイメージを明確にしながら事物現象を推論することができた。また、言葉だけでは伝えきれない児童の思考を絵や図、立体モデルを示しながら伝え合うことで理解し合うことができた。
- 絵や図を使って児童の思考を視覚化したことで話し合い活動の視点が絞られ、見通しを持った問題解決が可能になった。また、自分と友達の考えの共通点や相違点に気付き、自分の考えを追加したり、修正したりし、よりよい考えに高めることができた。
- 立体モデルの活用によって、絵や図だけではとらえることのできない重さの変化について、モデルを操作しながら説明し合うことで実感を伴って理解することができた。
- 児童は少しずつ違ったイメージを持っていたため、考えの相違点や共通点を分類整理していくのに時間がかかった。児童の思考を視覚化の際、考える視点を焦点化したり、分類する視点を明確にしたりするなどの工夫が必要である。

〈参考資料〉

初等理科教育 2011年 5月号6月号

※日置光久「理科でどんな力が育つか」

東洋出版社2007

優良賞

教育課程に位置づけた学校図書館活用の実践

～自ら学び、思考し、表現する生徒の育成を目指して～

袖ヶ浦市立蔵波中学校

校長 御園 朋夫

1 主題設定の理由

(1) 今日の課題から

情報化、グローバル化が急速に進み、日々変化していく社会の中で、自分らしく逞しく生きる力を育むことは学校教育における重要な役割である。現代、そして未来に生きる力とは、ただ知識を習得するだけでなく、それらを生かして自ら課題を見つけ、解決する能力であり、自分の考えをわかりやすく表現し、発信することのできる能力である。

平成20年に改訂された学習指導要領では、教科等における探究的な学習の意義が強調されている。今や学校図書館は、単なる読書センターとしてだけでなく、探究的な学習に対応する学習・情報センターとして機能することが求められている。多様な情報を活用し、自らの課題を解決できる場として学校図書館が意図的、組織的に活用されれば、自ら学び、思考し、表現する生徒の育成につながると考える。

(2) 本校における研究課題から

本校では、学校教育目標を受け「自ら学び、思考し、表現する生徒の育成」という研究主題を設定し、授業において自分の考えを書いたり、発言したりする場面を設定し取り組んでいる。また、日々の授業や学校生活において、探究的学習の機会を多面的に設定し、継続していくことが、思考力、表現力の育成につながると考える。

また、袖ヶ浦市では読書教育を推進し、探究型の学力を育む読書活動の充実を重点の一つとしてあげている。本市は、市内の公共図書館と学校図書館、博物館をつなぐネットワークにより、図書や博物館資料の貸出が可能である。学校図書館は、学校司書が常駐し、職員と連携して資料収集の学習支援やレファレンスサービスを行うことにより、探究的な学習を進める場として機能している。

そこで、本校では、学校図書館を積極的、かつ組織的に活用することが、探究的な学習を推進すると考え

た。その手立てとして、図書館を活用した調べ学習を、総合的な学習の時間として、教育課程の中に位置づけた。このシステムにより、全校生徒が3年間の継続した学びを体験することが可能になっている。継続した学習こそが、思考力や表現する力をより効果的に育成できると考え、教務部、司書教諭が中心となり、調べ学習の計画を立案、提案し、学校全体で取り組んでいる。

2 研究の目標

学校図書館の活用を教育課程に位置づけ、全校体制で取り組むために必要な支援を明確にする。また、「課題を見つけ→調べ→まとめ→発表する」という学習プロセスを全校生徒に体験させることで、生涯にわたって応用できる「学び方」を身につけさせ、学んだことを表現し、発信する力を育成することを目指している。

3 研究の方法

(1) 「学び方の習得への支援」

自ら課題を設定し、情報を収集し、創造的に活用するための支援を行う。

(2) 「自己表現の機会の設定」

自分の考えを発信する場として、また、知識や情報を他者と共有する場として、全校生徒がプレゼンテーションする機会をつくる。互いに聞きあい、評価することを3年間継続して行う場を設定する。

(3) 「学びの場の共有」

生徒や職員が、学習情報センターとしての学校図書館の機能を生かし活用する。

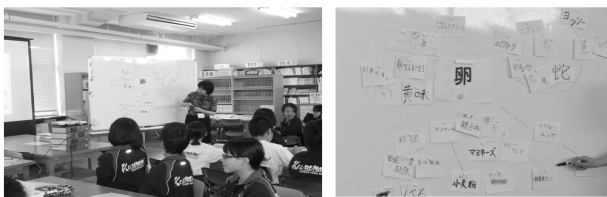
4 研究の実践

(1) 「学び方の習得への支援」

全学年、ガイダンスから調べ学習をスタートしている。それぞれの学年の実態に応じて、生徒の意欲を高めるようなガイダンスの方法を、学校司書と司書教諭が検討を重ね実践してきた。ガイダンス後は、図書館とコンピュータ室を利用し、学級担任と学校司書が連携して調べ学習の指導をしている。

《1年生に向けたガイダンス》

初めて調べ学習に取り組む生徒がほとんどなので、学校司書と司書教諭がクラス単位で行っている。このガイダンスでは、調べ学習のゴール（プレゼンテーション）を示し、学級担任と生徒が、取り組みの見通しをもてるようにしている。また、テーマを設定する時にヒントになるような学習活動を必ず行うようにしている。資料①は、一つの言葉から発想を広げるウェビングという方法の演習の様子である。「卵」という言葉からイメージした言葉を生徒が発表し、学校司書がホワイトボードに貼りながら分類しているところである。資料① 1年生向けガイダンス ウェビングの様子



《2・3年生にむけたガイダンス》

前年度の調べ学習の取り組みをふまえ、学校司書と司書教諭が学年単位で実施している。テーマ設定と作品作りのアドバイスが中心であるが、その学年の実態に応じて内容を検討している。今年度は、幅広い視点でテーマを探せるように、様々な分類の本に関わるクイズを使って対話をしながら、関連する本を紹介していった。また、情報リテラシーの面から、資料の引用の仕方や著作権について説明し、作品に生かせるようにした。

《その他》

調べ学習の取り組み進度にあわせて便り（資料②）を発行し、生徒と学級担任が、いつ、何をすればよいかを共通理解し、見通しがもてるようにしている。

資料② 調べ学習の便り

調べ学習guide

Lets try調べ学習!

調べ学習便り NO. 1
2015.6.8
文責 図書担当

沖縄地方が梅雨入りをし、関東地方の梅雨入りも間近でしょうか・・・
さて、最近中学校では、毎年恒例の調べ学習が始まります。今年は昨年度よりもっと早いスタートです。夏休みが中心となりますが、その分、相談する時間や、休日にアンケートをとり、データ収集する時間もあります。自分の身の回りや、体験から、「家だな！」「うげなげだ！」「うげなげだ！」「うげなげだ！」止めたことを、図書館の資料を中心とした、いろいろな方法で調べてみましょう。そして、自分だけのレポートとしてまとめ、調べたことや自分の思いをみんなに伝えてみましょう。

～調べ学習の取り組み計画～

★前期(6月7月)
①調べ学習ガイダンス(菊地先生と松井先生) ★図書館
「調べ学習の進め方とテーマについて」
6/9(火)総合の時間 13R, 16R
10日(水)総合の時間 14R, 15R, 11R
12日(金)3年生(菊地先生と松井先生) ★体育館
16日(火)2年生(菊地先生と松井先生) ★体育館

②テーマ探しと資料集め(2～3時間)
★レポートのまとめ方について最終の時間に説明します
★夏休み・・・時間を有効に使って調べ学習をさらに進めよう
★夏休み期間中、図書館開放日を設定します
★調べ学習の相談に応じます

★作品提出(6/31)
★前期(9月)
クラスでのプレゼンテーション
★後期(10月11月)
学校プレゼンテーション(各クラス2名)
全校プレゼンテーション(学年代表1名)★文化祭(10/31)にて
◎優秀作品は市の「図書館を使った調べ学習コンクール」に出展

「どんなテーマにしようか・・・!」

持ち物
「ファイル(20枚程度)をばさんで」
筆記用具

自分の興味関心があることがテーマになっていることが大切です。テーマが決まれば、ゴールが見えてくるというイメージをもち、思い通りに進めたいという思いで進んでいくと、あなたの求めているテーマが近づいてきますよ。

参考～先輩たちが取り組んだテーマ～

- ・面白いっぱいの海を目指して ・電気と音楽のしくみ
- ・家族って知ってる? ・賞状をさしゅう ・チョコレート
- ・科学者の研究 ・土の未来 ・恐らいたばこ・香り
- ・花火 ・キノコのかたち ・ピクニック ・自内閣
- ・3Dの秘密 ・三国志 ・宇宙 ・ワールドマップ
- ・地球温暖化 ・桜 ・電話100年の歴史
- ・地味な言葉 ・みづぼ物語 ・動物の創作
- ・自衛 ・デニス ・ガムについて ・外食生物
- ・藤沢湖 ・宇宙 ・コントラバス ・エジプト
- ・太陽の光 ・音の伝わり方

生徒は、集めた資料をもとに、夏休みを利用して、インタビューや調査、観察等も取り入れながら、さらに調べ学習を深め、一冊の作品として完成させる。夏休み中も支援できるように図書館解放日を設定し、学校司書と司書教諭が支援にあたっている。

(2)「自己表現の機会の設定」

夏休みが明けて、作品が完成した後、全校生徒が調べた内容をプレゼンテーションする場を設定している。クラス代表、学年代表を生徒の投票により選出し、文化祭の全校プレゼンテーションで、各学年の代表1名が発表するというスタイルで行っている。このプレゼンテーションに向けて、総合的な学習の時間や朝読書の時間を利用し、1人あたり3分の持ち時間で、自分が伝えたいことにポイントを絞り、原稿を準備する。今年度、2・3年生については、聞き手を意識して、要点を効果的に伝えるプレゼンテーションを目指し、キーワードを中心に記入するワークシートを活用した。

(3)「学びの場の共有」

新年度、新入生だけでなく全職員対象に図書館オリエンテーションを行い、生徒と共に学びの場を共有するというスタンスで図書館の活用をスタートさせている。これは、本校の図書館が読書センターとしてだけでなく、学習・情報センターとして活用する環境が整っていることを職員に周知し、教科担任が授業で図書館を活用しやすくするためである。座席を教科別にセッティングし、学校司書の選書により、授業で活用できそうな新刊図書を用意し、閲覧する時間を設けた。資料③左は、職員向けオリエンテーションの様子、右は、技術・家庭科の教科担任にむけた図書である。

資料③ 職員対象ガイダンス



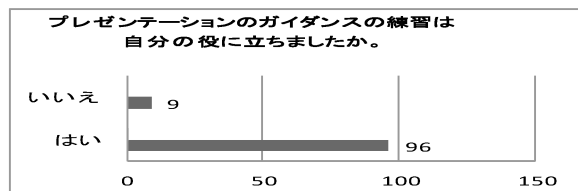
5 研究の結果

(1)「学び方の習得への支援」

1年生には、プレゼンテーションの準備の前にも、外部講師を依頼しガイダンスを行った。わかりやすい発表の方法や、よりよい話の聞き方について学習した。実際にペアで演習し、話し手と聞き手の相互作用でプ

プレゼンテーションの質が高まることも確認できた。資料④はガイダンスについてのアンケート結果と感想である。96%の生徒がガイダンスは役にたったと答えており、感想からも、よりよい話し方を意識して発表しようとし、聞き手の姿勢が大切なことを実感できたことがわかる。

資料④ 1年生対象のアンケートと生徒の感想



言葉もどのような手順でどのように説明するのかわかるように説明、発表できたと思います。

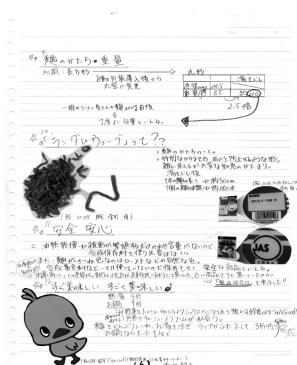
最初は、しっかり発表できずから心配していましたが、17分間のみんながちゃんと聞いてくれて、うれしかったです。そして、友達も発表を聞いて、上手な所をたくさん見つけられてとても勉強になりました。

調べ学習後に3年生対象に実施したアンケート調査では、96.2%の生徒が調べ学習をやったよかったと回答している。また、「興味をもったことは自分から調べたいと思った」、「自分の知らないことをたくさん知り、調べることの楽しさを知った」、「取り組んでいるうちに楽しくなり、もっと知りたいと思った」等の感想があげられ、知らないことを知る楽しさや喜びを味わえたことがわかる。また、それは、さらに知りたい気持ちにつながっていくこともわかる。

資料⑤は3年生の作品の一部である。博物館に行き見聞したことや、図書やインターネットなど様々な方法で調べたことを組み合わせてまとめた作品である。レイアウトも工夫され、調べることの楽しさが伝わってくる作品になっている。また、引用の仕方や参考文献リストなどの記載の仕方もきちんと身についており、

著作権への配慮もできている。

資料⑤ 左：作品の一部
下：参考文献リスト



参考文献リスト (1年生対象)	著者	書名	発行所	発行年
1. 動物の図鑑	山田	動物の図鑑	小学館	1999
2. 自然の図鑑	山田	自然の図鑑	小学館	1999
3. 植物の図鑑	山田	植物の図鑑	小学館	1999
4. 動物の図鑑	山田	動物の図鑑	小学館	1999

また、資料⑥は、資料⑤の作品の生徒の感想である。調べ学習の取り組み過程を実感しながら意欲的に取り組んだことがわかる。プレゼンテーションについても、仲間に聞き手になってもらいながら何度も検討し、よりよい発表の仕方を考えて取り組んだことがわかる。

資料⑥ 生徒の感想

調べ学習の取り組み過程を実感しながら意欲的に取り組んだことがわかる。プレゼンテーションについても、仲間に聞き手になってもらいながら何度も検討し、よりよい発表の仕方を考えて取り組んだことがわかる。

(3) 自己表現の機会の設定

クラスにおいて、全員が3分の持ち時間で発表することができた。資料⑦はクラスプレゼンテーションの様子である。実物投影機で資料を提示したり、クイズを取り入れたり、聞き手の興味を引く工夫をしていた。

また、資料⑧は2年生の学年プレゼンテーションの様子である。学年が上がるにつれて、身振りも加わり、表情豊かに伝える生徒が増えている。聞き手を意識して、伝えたい思いが感じられる発表になっている。

資料⑦



資料⑧



聞き手意識して伝える手立てとして、今年度はワークシートを工夫した。2・3年生については、発表原稿を文章としてまとめるのではなく、キーワードをメモする形式にした。資料⑨は3年生の感想である。発表原稿の作成の仕方を工夫することで、相手意識を高められることがわかった。

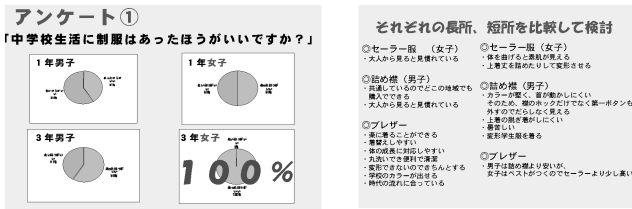
資料⑨ 生徒の感想

今回の調べ学習のプレゼンは原稿を書く、7-ドもまとめるだけだったので、発表のときは前を見て自分の考えや思いを伝えることができました。

また、プレゼンテーションする際には、聞き手に感心のある話題を取り上げたり、視覚的な資料を使ったりするとわかりやすいことを助言し、構成を考えさせた。資料⑩は、全校プレゼンテーションで、1年生代表の生徒が使った資料である。作品の内容の中から、3年生と1年生に実施したアンケート結果を提示する

ことで、聞き手の関心を引き、短時間でもわかりやすい発表をすることができた。

資料⑩ 全校プレゼンテーションの資料



(3)「学びの場の共有」

さまざまな教科の学習においても、学校司書が教科担任の要望に応じ、連携した授業実践が行われるようになった。

2年生の理科の学習では、「動物の頭骨から生活を学ぶ」授業で、博物館資料と図書を活用した観察を行った。生徒は自分の探している動物の本を見つけ、頭骨の標本と比較しながらその特徴を確かめた(資料⑪)。複数の本を活用し調べたことをまとめ(資料⑫)、発表し合い、学んだことを共有した。

資料⑪ 標本と図書を比較



資料⑫ 複数の図書で調べる

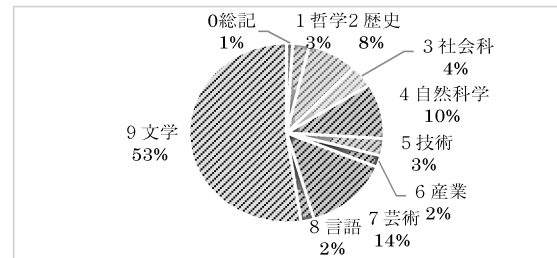


また、1年の社会科の歴史的分野の学習において、複数の図書資料とインターネットを活用し、単元ごとに継続して3回の調べ学習を行った。調べる過程においては、学校司書が資料を選択する支援をした。その結果、生徒は、グループで話し合いながら、歴史分野の資料だけでなく人物、辞典、伝記、百科事典等の多様な資料を活用することができた。その他にも、多くの教科で日常的に、学校図書館が活用されている。

授業の中で積極的に図書を活用したり、調べ学習をしたりすることは、生徒の読書傾向にも影響を与えていると思われる。資料⑬は、今年度の本校の図書館利用状況である。読み物が中心となる、「9類・文学」の利用が圧倒的に多いが、比較的幅広く利用していることがわかる。調べ学習を行った社会科の図書「2類・歴史(地理・伝記を含む)」や理科の学習に関わる「4類・自然」の図書も比較的多く利用されている。

さまざまな学習の場面で、図書に出会うきっかけを作ることが、読書への関心を高め、幅広い利用につながっているのではないかなと思う。

資料⑬ H2811.2現在 H28年度図書館利用状況



6 成果と課題

学校図書館を活用した調べ学習を教育課程に位置づけたことで、全校生徒一人ひとりに学校図書館で学ぶ時間が保障された。この、組織的な運営が3年間継続した学びにつながっている。そして、生徒の作品やプレゼンテーションからは、学年が上がるごとに、その質が向上しているように感じられる。

3年生を対象にした本校のアンケート調査では、「調べ学習の取り組みで学んだことが、普段の生活や社会に出たときに役立つ」と回答した生徒が80%を越えている。さらに、プレゼンテーションを3年間継続したことで、「人前で話す自信がついた」、「自分の進路選択や将来に役立てたい」と感想を述べる生徒が非常に多かった。これらの実態は、全国学力状況調査の結果にも反映され、該当する項目の数値が全国平均よりも高い結果となっている。

また、総合的な学習の時間に学んだことが他教科の学習にも生かされている。国語科の学習アンケートでは、「自分の考えを発表するときに、聞き手に上手く伝わるように話の組み立てを考えている」と70%の生徒が回答している。この結果は、「人前で話をするのが得意である」と回答した生徒が60%いることの裏付けになっているように思う。話し方を学んだことが生徒の自信になり、話すことが好きな生徒が育つのではないかなと考える。

さらに、学級単位で調べたりプレゼンテーションしたりすることが、知識の共有だけでなく、生徒相互が認め合う機会となり、学級づくりにも、いい影響を与えていると思われる。

今後も、この調べ学習の取り組みを継続しつつ、3年間の自己の成長が実感できるような評価のあり方を検討していきたい。また、テーマ設定の指導・支援の仕方を検討し、3年間の取り組みの中で、より専門的、社会的テーマで生徒が取り組むようにし、教科担任と司書教諭が連携し、培った力を教科の学習に生かせるような手立てを構築していくことが今後の課題である。

共に学び合う児童の育成 ～算数学習における表現活動の工夫～

流山市立流山小学校

校長 田 根 洋

I 研究の概要

1 主題設定の理由

学習指導要領改訂は、「算数的活動の一層の充実によって、①基礎的・基本的な知識・技能の定着、②数学的な思考力・表現力の育成、③学ぶ意欲の向上を図ること」の3つが基軸となっている。また、本校の児童の実態においては、計算する力はあるものの、問題を読み取る力や論理的に考え表現する力が乏しいことが挙げられる。

そうしたことから、平成 27 年度から「数学的な考え方」「表現活動」に焦点を当て、「書く」「聞く」「話す」「考えをつなぎまとめる」活動を研究し、児童の思考力、表現力の向上を図ることを目指している。また、児童自身が自分だけでなく、友達と共に表現活動を楽しみ問題解決学習を行っていくこと、学び合いの素地が培われることを目指し、本研究を進めている。

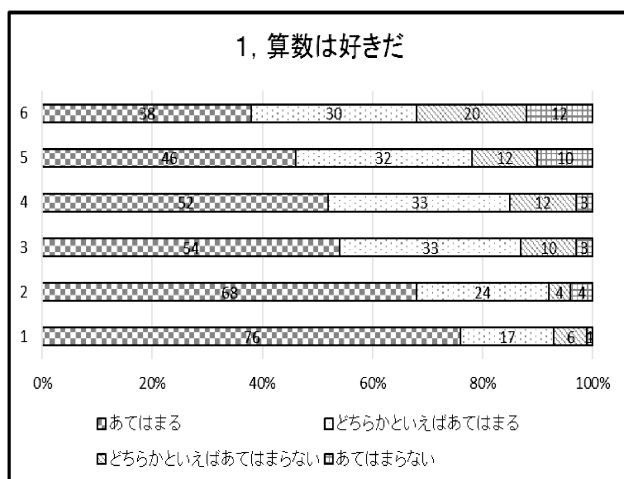
2 研究主題・副主題

研究主題

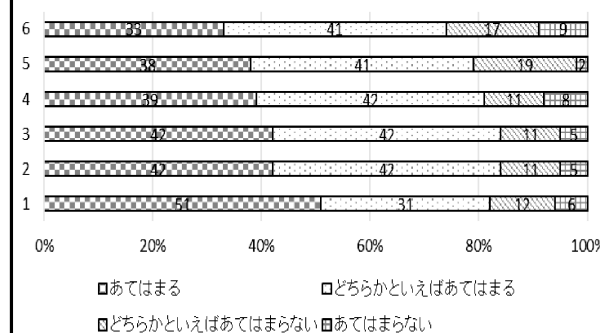
共に学び合える子の育成
～算数学習における表現活動の工夫～

3 児童の実態

本校の児童に算数科に対するアンケートを行ったところ、以下のものであった。



6, 自分の考えと友達の考えを比べたり、友達の考えのよいところをみつけたりしている



「算数は好きだ」の質問に対し、概ね肯定的に答えている。高学年になると、否定的にとらえている児童が増える傾向があるが、この結果から本校の児童は算数に関心を持ち、抵抗なく取り組めていると言える。また、「自分の考えと友達の考えを比べたり友達の考えのよいところを見つけないでいる」に対してもそれぞれ肯定的に答えている児童が多い。学年によって違いはあるが、児童は「自分の考えと友達の考えをくらべる」「いろいろな方法がないか考えようとする」といった意識を持って学習に臨んでいることがわかる。

II 研究主題に対する基本的な考え方

1 研究主題のめざすもの

本校の考える「共に学び合う児童の姿」、学び合いを通してどんな力をつけていくかを以下のようにまとめた。

【学団別 めざす児童】

低学年	・自分の考えをもち、伝えることができる子
中学年	・友達と自分の考えを比べることもことができる子
高学年	・友達の考えのよさを見つけ、深めることができる子
特支	・相手の話をよく聞いて考え、発言することができる子 ・友達と共に活動できる子

○流山小の考える共に学び合う児童の姿

- ・児童が自分の考えを持っている。
- ・児童が自分の考えを伝えている。
- ・児童が友達の考えを自分の考えと比べながら聞いている。
- ・児童が友達の考えを自分の言葉でおきかえられる。
- ・児童が自分の考えを振り返っている。

以上のような学びを通して、

よりよい考えを知ることができた
よりよい考えで解くことができた
より深く理解することができた

友達との学び合いを楽しみと感じ、進んで学習する児童の育成を目指していく。

2 研究仮説について

【研究仮説】

「つなぐ」表現活動の工夫をすることによって、共に学び合う児童が育つであろう。

○ 流山小の「表現活動」とは

- ・自分の考えを書く表現活動（ノートの指導）
- ・自分の考えを話す・相手の考えを聞く表現活動（比較検討での工夫）
- ・聞いて考える表現活動（練り上げてまとめる）

○ 流山小のつなぐ「表現活動」とは

- ① 既習事項とつなぐ活動
 - ・既習事項を振り返る時間に、前時との「つながり」を明確にさせる。
 - ・既習事項での言語活動を掲示し、表現の方法を明確にする。
- ② 考えをつなぐ活動
 - ・友達の考えと自分の考えを比べる。
 - ・話し合いの中で1つの考えを数人で「言葉をつないでいく」。
 - ・話し合いの中で複数の考えの相違点を見つけ、「考えをつないでいく」。
- ③ 自分の考えの変容とつなぐ活動
 - ・学んだこと（わかったこと）を自分の言葉としてまとめる。

【学団別目指す児童像にせまるための手立て】

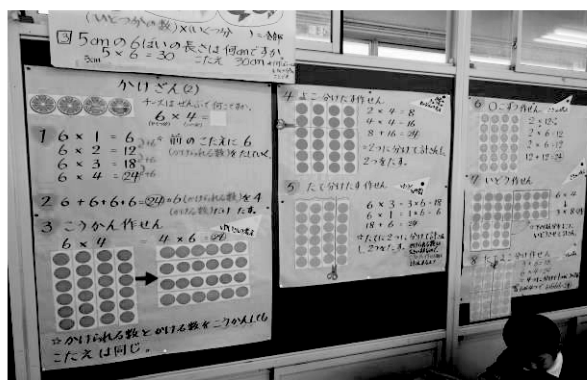
低学年	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項をもとに、自分なりの考えを表現する工夫をする。 （既習事項の活用・導入の工夫・教材の工夫など） ・自分の考えを伝える場を工夫する。 （発表の順番の構成・板書構成） ・自分の考えと友達の考えをつなぐ場を工夫する。 （発表の構成・板書構成）
中学年	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項をもとに、いろいろな自分の考えを書く工夫をする。 （既習事項の活用・導入の工夫・教材の工夫・ノートの工夫・個への支援の工夫など） ・互いの考えを伝え合う場を工夫する。 （ペアトーク・グループトークなど） ・自分の考えと友達の考えをつなぐ場を工夫する。 （発表の構成・板書構成）
高学年	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項をもとに、いろいろな自分の考えを書く工夫をする。 （既習事項の活用・導入の工夫・教材の工夫・ノートの工夫・個への工夫など） ・互いの考えを伝え合う場を工夫する。 （ペアトーク・グループトークなど） ・自分の考えと友達の考えや友達同士の考えをつなぐ場を工夫する。 （発表の構成・板書構成）
特支	<ul style="list-style-type: none"> ・既習事項を手掛かりにする。 ・共に活動する場を工夫する。 ・個に応じた表現の仕方について支援をする。

III 研究の実践

1 「つなぐ表現活動」の実践

① 既習事項とつなぐ学習の工夫

既習事項の掲示物を使用する。導入時に使用したり、自力解決の場面で、児童が既習内容を確認したりする。教室内に掲示しているため、算数の時間だけでなく、普段の生活の中で目にすることができる。



②考えをつなぐ学習の工夫

本校の学び合い活動は、一斉学習・グループ学習・ペア学習の3つの学習形態で行う。学習の内容や学習場面、児童の実態に応じて使い分け、より理解が深まる方法を選択している。

一斉学習は、基本的な学びの場である。どの学習場面においても、様々な児童の活躍が見られる。

いろいろな解決方法や表現方法に気付くことができ、また、話し方の良い手本を見つけていくことで、一人一人が成長していく。児童の満足感も得られやすい。

グループ学習は、解決の見通しを持つ場面、比較検討の場面が主である。グループにすることで、誰もが自分の考えを話すことができる。また、直接ノートを見られるので、理解もしやすい。適用問題をグループで相談しながら解いていく方法も取り入れている。難しい問題には効果的で、児童も意欲的に取り組む様子が見られる。



ペア学習は、すぐに隣りに座っている児童と活動できることから、主に低学年で行うことが多い。例えばブロックや三角定規などの学習用具を扱って説明をする場面で、隣り同士で確かめ合う。また、まとめの場面で文を作る時に相談するなど、様々な場面で行うことができる。短時間で学び合いを行う場合にペア学習は有効である。



また、一斉学習の中で、「見合う学習」を取り入れている。見合う学習は、自分の座席を離れ、自由に

多数の人のノートを見にいく活動である。自分と同じ考えの人がいるか、どのようにノートに書いているか。また、自分と違う考えの人はどのような方法なのか、などノートを見る観点を絞って互いのノートを見合う。低学年の児童には観点を絞ることが難しく、目的が達成できないことがあるため、主に、3年生以上の児童が行っている。高学年では、見合う活動の後、自分のノートに付け足しをするなどし、よりよい表現活動ができるようにする。



また、学習場面において、どのような言葉が有効であるか学習課程に沿ってまとめた。授業の中で教師が常に意識していくことで、児童にも身に付けていく。

○流山小の表現活動における「つなぐ言葉」

【教師編】	【児童編】
1 導入 T「今までと同じところ、違うところはどこですか。」	1 導入 C「今までと～が同じだと思います。」 C「～が違うと思います。」 C「習った～が使えそうです。」
2 自力解決 T「前の学習はつかえるかな。」 T「いろいろな方法で考えられるといいですね。」 T「図で書いてみましょう。」 T「言葉を付け加えてみましょう。」 T「説明を書けるといいですね。」	2 自力解決
3 比較検討 T「同じ考えの人はいましたか。」 T「〇〇さんの考えを自分の言葉で言える人はいますか。」 T「〇〇さんの考えに付け足しがある人はいますか。」 T「大事な言葉が出てきましたね。」 T「違う言葉が出てきましたね。」 T「似ていてもいいので、だれかもう一度説明してください。」 T「ノートを見せて説明するのもいいですね。」 T「隣の人やグループの人と説明し合いました。」	3 比較検討 C「〇〇さんの言いたかったことは～だと思います。」 C「〇〇さんの考えに付け足します。」 C「どうして～になるのですか。」 C「他にあります。」 C「〇〇さんの考え方と△△さんの考えは～が同じです。」 C「〇〇さんの考えと少し違って、私は～です。」 C「〇〇さんの考えは、やりやすいです。」 C「前に習った～と似ていて～です。」
4 まとめ T「どの考えにも共通していたものは、なんでしたか。」 T「今日の授業で大事な言葉が出てきましたね。」 T「言葉をつないでいきましょう。」	4 まとめ C「わかったことは～です。」 C「まとめると、～となります。」

【話し合いを活性化させる教師の言葉・児童の言葉】

③自分の考えの変容とつなぐ活動

振り返りの場面で、児童がわかったことを取り上げながら、本時の学習をまとめあげる。友達の考えを聞いたことで、よりよい考えに近づいていく。どのように考えが変わったのかをノートに書いていく。

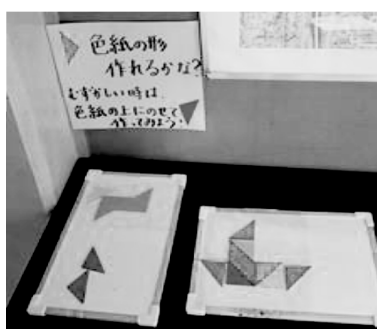
2 その他の実践（算数の環境）

①図書室の算数コーナー



児童の算数に関する関心を高めるために、図書室に算数コーナーを設け、児童が自由に本を手にとれるようにしている。

②廊下・階段の算数コーナー



IV 成果と課題

<成果>

- 「書く」力を向上させるため、ノート展を設けたところ、見やすい丁寧なノートを心がけるようになった。
- 児童の考えをつなぎ、理解を深めるための「つなぐ言葉」を整理し、教師が意識して授業に臨むことで

児童の話し合い活動がより充実したものになった。児童自身が「〇〇さんの考えにつなぎます」と積極的に発表するようになった。

- 一斉学習だけでなく、グループ学習やペアトークを取り入れたことで、学習の効果が上がった。一斉学習の中でも、友達と自分の考えをつなぐ「ノートを見合う学習」を行ったところ、友達の表現のよさや考えを意欲的に見つけに行く様子が見られた。また、グループで考えを伝え合ったり、教え合ったりする活動を通して、学び合う態度が身についてきた。
- 既習項と本時をつなぐために、既習事項の掲示物を作成し、教室内に掲示することで、児童は自然に必要な情報を掲示物から得て、問題解決に役立てることができるようになった。
- 校舎内に算数コーナーを設けた。休み時間にコーナーを訪れる児童が多く見られた。また、図書室に算数の本を多数導入し、自由に読むことができるようにしたことで、児童の算数への興味関心が高まった。

<課題>

- 話し合い活動を十分に行うには、時間配分の工夫が必要である。その時間のねらいを整理し、余裕をもって取り組むことが大切である。
- グループ学習は、児童が話し合いの進行を行う。話し合いを円滑に進めるには、グループ内の学習リーダーを作ったり、話し合いの仕方や約束を指導したりして、児童が主体的に学習できる場を作ることが有効であると感じた。グループ内で児童同士が自由に質問したり、教えたりできるようにしていきたい。
- 学び合い活動を充実させるには、学級づくりが土台となる。互いを認め、助け合える仲間づくりが重要だといえる。そして、「話すことができる」「聞いて理解できる」力も必要である。学級づくりと同時に、基礎的・基本的事項が身につくように学力の向上にも取り組まなければならない。

参考文献

「学び合い」の質を高める算数授業

石田淳一・神田恵子 著

主体的に学習にとりくむ児童を育てる教材の工夫

～第5学年「メダカのたんじょう」にクサフグの教材を加えて～

勝浦市立興津小学校

教諭 田 崎 優 一

1 主題設定の理由

(1) 地域の実態から

本校学区の勝浦市興津地区は、目の前には興津海岸、周りを山で囲まれ、豊かな自然があふれている。クサフグの産卵は入り江の岩場で観察できるが、全国でもクサフグの産卵が観察できる場所は数えるほどしかない。産卵行動の条件を満たした観察地の価値は非常に高く、学校や各種団体で観察が続けられてきた。そこで安全に観察できる場所を探していたところ、8年前、本学区の興津海岸でも、クサフグの産卵が初めて確認された。興津海岸の観察地は防波堤であり、小学校からも歩いて5分、誰でも安全に、大人数でも観察できる。こういった恵まれた地域の自然に目を向けることは、児童の主体性を高めるためにとても大切なことであると考え。そこで本研究では、クサフグの特異な産卵行動が観察できる場所が学区内にあるという条件を生かして教材化を図り、主題にせまりたい。

(2) 児童の実態から

本学級には、学習に意欲的で理科が好きな児童が多い。しかし、自ら野山で虫採りをしたり、海へ遊びに行ったりするという児童は少なく、自然環境が豊かな地域においても、主体的に自然に親しんでいるとは言えない現状である。また「メダカのたんじょう」の学習を進めるにあたって、一部の児童は既に通年でメダカを飼う経験をしており、教室内でメダカを飼うことに興味を持てていなかった。そこで本単元では、メダカだけでなく、本校学区の興津海岸で産卵行動が観察できるクサフグも教材として取り上げ、比較しながら、その孵化の様子を観察することで、それぞれの魚の特性に気づかせて、理解を深めさせたい。児童の関心・意欲を高めるような飼育環境を整えたり、記録方法を工夫したりすることで、自ら課題を決め、自分の問いを解決したという達成感を味わわせ、主体的に学習にとりくむ児童を育てたい。

2 研究の目標

クサフグとメダカの卵を比較する一人一観察を通して、主体的に学習にとりくむ児童の育成を図る理科学習のあり方を、実践を通して明らかにする。

3 とりくみの視点

主体的に学習にとりくむ児童を育てるために次の手立てを講じ、効果を検証する。

【本提案におけるめざす児童の姿】

- ・疑問を持つ子ども
- ・驚きや興味を持って飼育観察することを通して疑問を解決していく子ども
- ・対象を丁寧に観察し、継続的に記録したことを友達に伝えようとする子ども

(1) クサフグの生態や利点について調査して教材として活用する。(視点1)

(2) クサフグを教材として取り入れた単元計画の工夫をする。(視点2)

ア メダカ・クサフグとの出会いに向けて

イ クサフグの産卵の観察会の実施

ウ 一人一観察の工夫 エ 教材の選択

オ 地域人材の活用

(3) 学習のつながりのわかる観察記録ファイルを工夫する。(視点3)

ア ワークシートの工夫

イ ファイル形式でのまとめ方の工夫

4 研究の内容

(1) クサフグの生態や利点について調査して教材として活用する。(視点1)

クサフグは猛毒のテトロドトキシンを持っているが、さわったあとによく手洗いをするなどの注意をすれば飼育することができる。児童には水槽をたたいたり、水に手を入れたりしないよう事前指導を行う。**表1**にクサフグを扱う利点をまとめた。

クサフグを扱う利点
<ul style="list-style-type: none"> ・興津海岸において自然な状態で産卵が観察できる。 ・食餌行動が観察できる。 ・大量の卵を一度に採集可能。 ・産卵日を予測し観察、採集することができる。 ・孵化までの期間が短く（5日）、一日の変化が大きい。

表1 クサフグを扱う利点

（2）クサフグを教材として取り入れた単元計画の工夫をする。（視点2）

ア メダカ・クサフグとの出会いに向けて

- ・児童の「育てたい」「知りたい」という気持ちを高めるために、単元開始前から教室でクサフグとメダカを飼育し始めた。
- ・クサフグに愛着を持ってもらえるように、小さい個体を用意し、安全性について話した。生息している場所の環境に近づけるために、海の砂と海水を採取し、海水用ポンプを設置した。

【児童の様子】

- ・えさを交代であげたり、学級会で名前決めたりしたことで、クサフグやメダカに対して愛着を持って接するようになった。

イ クサフグの産卵の観察会の実施

ダイナミックなクサフグの産卵を観察することで、生命の神秘さを感じ、クサフグの生態や卵について興味を持ってもらえるように、卵の採集を兼ねて「クサフグの産卵観察会」を行った。クサフグの産卵は学区内にある海岸で見られる。児童には、産卵の観察会が実施されることを呼びかけた。授業時間外のため、家庭への協力の呼びかけや、安全に配慮しながら行った。直接見に行くことのできなかった児童のために動画を撮影し、クサフグの産卵を全員が観察できるようにした。



図1 クサフグの産卵



図2 クサフグの産卵を観察する児童

【児童の様子】

児童はクサフグが堤防に上がって激しく産卵する様子をじっと観察していた。予想していなかった産卵の様子に驚きの声をあげていた。

【感想】

色々な条件が重なっているところでは産卵しないことがわかりました。その条件がここでそろっててすごうれしかったです。

ウ 一人一観察の工夫（マイメダカ・マイクサフグ・マイ解剖顕微鏡）

生物への探究心を高め、主体的に学習にとりくむためには、児童が対象と十分関わることが大切であると考え、メダカとクサフグの受精卵を一人一つずつチャック付きポリ袋に入れて配付した。（マイメダカ・マイクサフグ）

さらに、教室に一人一台、解剖顕微鏡を用意していつでも自由に観察できるようにした。（マイ解剖顕微鏡）

全員に同じ産卵日の卵を用意することで、発生段階がほぼ同じになるようにした。



図3 観察をする児童の様子

【児童の様子】

- ・児童たちは登校してからの朝の時間や休み時間を使って自由に観察をしていた。
- ・マイメダカ、マイクサフグを筆箱に入れいつでも持ち歩き、2つを見比べていた。
- ・各自で名前をつけ、愛着を持って観察できた。

エ 教材の選択

児童には2種類の卵を配付してあるが、授業時間内に両方を観察し記録することは、時間的に難しい。そのため、卵が受精してから孵化するまでを継続して観察・記録していく対象を1つ選択させた。2種類の卵の日常的観察を続けながら、記録を行った。

メダカコース …メダカの卵を観察・記録する。

クサフグコース…クサフグの卵を観察・記録する。

【児童の様子】

- ・自分が詳しく調べていきたいと思うコースを自由に選択させたことで、積極的に卵を観察したり、友達と卵の様子について意見を交流したりして、主体的に学習にとりくむ姿が見られた。

オ 地域人材の活用

第1次のクサフグの産卵の観察会では、クサフグの特異な産卵行動について詳しく教えてもらえるように、地域でクサフグを研究されている方をゲストティーチャー（以後G T）として招いた。

第2次では海の中と陸上の食物連鎖についての話を聞いたことで、自分の疑問を解決する調べ、学習につながった。



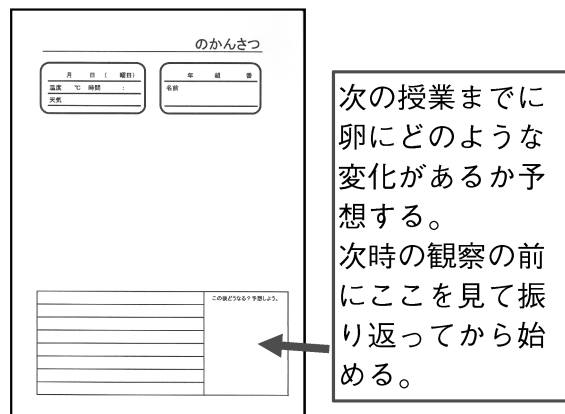
図4 G Tから話を聞く児童

（3）学習のつながりのわかる観察記録の工夫（視点3）

観察記録のワークシートを重ねて掲示していく方法では、前回の観察記録と比べてどのようなところが変わったのか比較しにくかったり、継続的な観察に意欲が高まらなかったりする様子が見られた。そこで本単元では、ワークシートやまとめ方を工夫して、成長の様子をわかりやすくしたり、観察への意欲を高めたりしていく。これを「観察記録ファイル'16」とした。

ア ワークシートの工夫

卵の観察をする際、卵から稚魚までの変化を予想することは、漠然としていて難しく、全く予想できない児童もいるのではないかと考えた。そこで、予想がしやすくなるように毎時間ごとのスモールステップで予想させていくこととした。本研究ではワークシートに「このあとどうなる？」の欄をつくり、毎時の観察記録後、卵の様子は次の授業までにどう変化しているかを予想させるようにした（図5）。また、授業の初めに前時に記入した予想を振り返ってから観察に臨ませることで、変化のつながりを意識させることができると考えた。



次の授業までに卵にどのような変化があるか予想する。
次時の観察の前にここを見て振り返ってから始める。

図5 ワークシートの使い方

イ ファイル形式でのまとめ方の工夫

観察記録のワークシートを持ち運びできるファイル形式にまとめ、前時からどのように変化したのか手元でわかるようにした。また、メダカコースを選んだ児童とクサフグコースを選んだ児童でチームを組み、互いの観察記録を共有できるようにした。見開きで左側には自分の観察記録、右側にはペアの相手の観察記録を貼り、それぞれの卵の変化の様子がわかり、2種類の卵の変化の様子を比較できるようにした（図6）。また、自分の観察記録のコピーが友達のファイルに記録されていくことで、満足感を得ることができ、次への意欲につながると考えた。

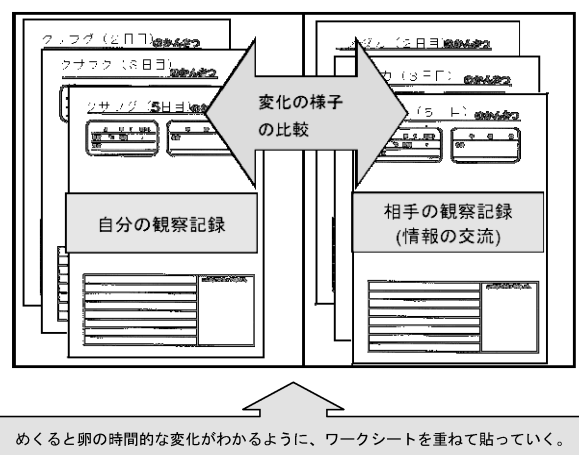


図6 観察記録ファイルの使い方

（4）結果と考察

ア クサフグを教材として取り入れた単元計画の工夫について

（ア）形成的授業評価の変容から

図7は単元における形成的授業評価の変容である。「メダカの卵の産まれ方」の学習では、まだ児

童の総合評価は4点前半と低くなっている。しかし、クサフグの産卵観察会後は、評価が上がっている。児童がクサフグの産卵の様子に感激し、意欲が高まったことがわかる。次の観察2（4/10）ではさらに評価が高くなっている。ここからクサフグの卵の変化が始まり、メダカと比較した際の違いが大きくなっていったことで、さらに児童の興味・関心が高まっていったことがわかる。

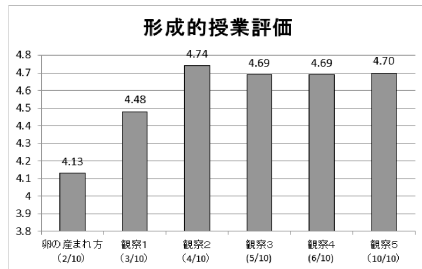


図7 形成的授業評価の変移

(イ) 児童の感想から

【単元終了後の児童の感想】

- ・メダカとクサフグの成長のちがいを比べることができた。
- ・メダカとクサフグを観察できて、学習にすごく満足した。
- ・メダカとクサフグはどちらもたまごの中で親に似た姿になることがわかった。

単元終了後の感想では、メダカとクサフグを比較したり、生息地や生態に関連づけたりした記述が見られた。教科書にないクサフグをメダカと一緒に調べ、学習したことに非常に満足しているという回答が多かった。

イ 観察記録ファイルの工夫について

事前事後アンケートから

表2は、児童が観察記録を書く際に、大切だと考える視点である。

表2 観察記録を書くときの視点

事前	大きさ色 見た目 わかったこと 天気 日にち 気温 におい 成長の姿 そのまますをかく
事後	大きさ 色 様子 けっか 天気 日にち 気温 形 動き そのまますをかく 場所 時刻 予想 疑問

事前と事後を比べると「予想」「疑問」という項目が増えている。これは、観察記録を書く際に、「メダカとクサフグの今後の姿について予想をたてる」ということを毎時間行い、前後のつながりを意識しながら観察を進めた成果だと考える。また、「知りたい」「なぜだろう」という疑問が生まれるのは、

観察に対して意欲的にとりくんでいるからであると考えられる。

「観察記録をかくことができますか」という質問に対して、事前アンケートで「あまりできない」「できない」という回答の児童が比較的多かったのに対し、事後アンケートの結果では、全ての児童が「よくできる」「できる」という肯定的な回答になった。単元を通して、クサフグとメダカを一人一観察し、児童個々が十分に観察できるように教材を準備したことや「自分の観察記録が友達のファイルにも貼られるという満足感が、児童により詳しく観察記録を書こうとさせ、それが自信につながったと考える。

【単元終了後の児童の感想】

- ・友達のクサフグやメダカと比べやすかった。
- ・自分では気づけなかったことも、友達が気づいていることがあった。
- ・友達にはられるから正確にいてねいに書いた。

7 研究のまとめ

- メダカだけでなくクサフグを教材として取り入れたことで、児童は自己の問題の解決に主体的にとりくむことができた。
- メダカとクサフグの2種類の生物を観察させたことで、生き物に対する驚きが興味・関心を高めることにつながり、共通点や差異点に気付かせることができた。他の魚への見方・考え方を広げさせたりすることができた。
- 一人一観察させたことで、生き物に対する愛着心を高めるとともに、継続して意欲的に観察させることができた。
- 「観察記録ファイル「16」は観察に対して児童の興味・関心を高め、継続観察と成長の比較をさせることに有効であった。

【参考・引用文献】

- 『第2期教育振興基本計画』 文部科学省 2013
- 『小学校学習指導要領解説 理科編』 文部科学省 2008
- 『地域の自然を見つめる理科学習 ―5年 メダカとクサフグの成長の学習を通して―』 三神 修 1995
- 『一人一飼育を通して、比較しながら調べる能力を育てる指導法の工夫 ―3年「こん虫を育てよう」の実践を通して―』 小野孝之 2013
- 『科学的な思考力・表現力を高める指導法の工夫 ―第4学年「とじこめた空気と水」の実践を通して―』 橋本英正 2015
- 『クサフグの教材化（高校理科I）』 大蔵 健 1984

わくわくドキドキする魅力的なゲームを通しての社会性の育成

～自閉症・情緒障害通級指導教室2年間の取り組み～

松戸市立上本郷小学校

教諭 湯本 諒

教諭 渡邊 裕子

講師 夏井 友紀

1 はじめに

本教室は松戸市の自閉症・情緒障害通級指導教室として平成21年に開設した。当初通級児童数が3、4名程度であったが、年々増加し、今年度は32名となった。

本校及び近隣の5つの小学校計6校から週に一度通級して、異校異学年の編成による少人数(1日に6、7名)での学習を丸一日行う形式を取っている。それだけ自閉症・情緒障害傾向のある児童に対する特別支援教育のニーズが高まってきているとも言える。保護者の教科学習補充への期待はかなり高いが、ソーシャルスキルトレーニングやコミュニケーショントレーニングへの期待も大きい。その他、ビジョントレーニングや感覚統合トレーニング等にも力を入れて取り組んでいるところである。

2 研究主題及び主題設定の理由

本校の研究主題

「生き生きと学ぶ児童の育成」

を受け、研究主題を

わくわくドキドキする
魅力的なゲームを通しての社会性の育成

とした。

通級して来る児童は、自分の思い通りに事を運ぼうとしたり、勝敗にこだわったり、一番にやりたがったりしがちで、思いが通じないとパニックに陥りやすい面を持っている者が多い。一方で、何事につけ依存的な行動を取る児童もいる。また、周囲の様子や人の動きには関心がなく、集団から離脱しがちな児童もいる。いずれの児童も、通常学級においては、他の児童と「協力」して課題を解決するという事は難しい現状であり、コミュニケーションや対人関係に多くの課題を抱えている。

このような児童にとって、コミュニケーション力を高め、社会性を培うには、より实际的に体験から学べるソーシャルスキルトレーニングが必要なのではないかと考え、「ポプラアドベンチャーゲーム」を作ることにした。限られた時間の中で、児童にとってわくわくドキドキしながら夢中になって取り組んでいくことのできるトレ

ニングを通して、社会への適応力をつけていきたい。

児童にとって、わくわくドキドキしながら各ステージの課題をクリアし、「謎解き」によって最終ステージに到達するというゲームは、「相手を倒す」という形式をとらなくても十分魅力的である。毎回その時々児童の課題に合わせて内容を工夫・改善し、チームで励まし合い、互いの知恵と力を出し合って「協力」して取り組ませていく中で、コミュニケーション力を育て、他への思いやりや譲歩の経験、慕い慕われる喜びや、皆で協力してやり遂げる達成感などを味わわせ、社会性を培っていきたい。

3 研究の仮説

＜仮説1 ゲーム内容の工夫＞

- ・児童が心から達成したいと思えるようにゲーム全体にわくわくドキドキしたストーリー性を持たせ、適時性を考えたステージ課題を設定すれば、最後まで意欲的に取り組むことができるであろう。

＜仮説2 協力性・協調性の育成＞

- ・各ステージの課題を、全員が必ず参加するように設定することで、一人ひとりの課題に対する意識が深まるであろう。
- ・互いに意見を出し合い、聞き合うことが成功につながるという体験を通して、聞こうとする意識や相手に伝えようとする意欲が育つであろう。
- ・身勝手な行動が失敗につながったり、ペナルティになったりすることで、他との協調を考えようとする気持ちが育つであろう。

＜仮説3 リーダーの育成＞

- ・リーダーの役割を、ポイントを絞って押さえ、リーダーシップを取れるような課題や場の設定することで、リーダーとしての動き方が分かり、活躍できるようになるであろう。

＜仮説4 自己肯定感を持たせる＞

- ・目標設定の時間、評価の時間を位置づけることで、児童が自分の成長を感じ、自己肯定感を持つことができるであろう。

4 実践

(1) 1年目の実践

児童の社会性を高めるために、以下の4点を重視したポプラアドベンチャーゲームを考案した。

- 児童が心から「最後までやりたい。」「やらねばならない。」「達成したい。」と思えるようにする。
- 全員が必ず参加できるようにする。
- 身勝手な行動を抑え、周囲の様子を見たり、他者との協調を考えようとしたりすることができるようにする。
- 他者の意見を聞こうとしたり、自分の意見を相手に伝えようとしたりできるようにする。

＜実践例1—かき氷器を手に入れろ—＞

ア 「怪盗プラポからの挑戦状」 (仮説1)

怪盗から、かき氷器を奪った旨の挑戦状が舞い込み、全てのステージをクリアするとかき氷器が手に入り、かき氷が食べられるという設定にした。児童の意欲を高める導入部となった。

イ 「全員参加」 (仮説2)

全員参加のために

- 1人の意見だけで勝手に進めない。
- 意見を出し合う。
- 人の意見を聞く。

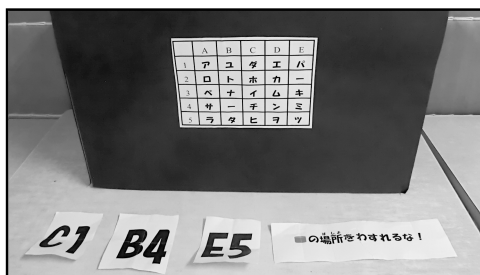
の3点を約束事項とした。また、「全員参加」からはずれた行動に気づかせるために、指導者はイエローカード（以下「YC」と表記）を使うことにした。YCが3枚提示されてしまうと、取り組んでいるステージを始めからやり直さなければならない。

YCにより、ゲーム中「全員参加」を意識させ続けることができた。

ウ 「ブラックボックスと文字表」 (仮説2)

全員が参加せざるを得ないステージである。

ブラックボックスの中から、記号が書かれた紙を必ず一人ひとりが取る。日々の文字表を読み解く学習を生かし、文字表から記号を解読する。その文字を組み合わせて謎を解く。



オ 「釣った魚の裏には文字」 (仮説2)

コミュニケーション力をつけるステージである。特に、意見を言うことが苦手な児童も発言できるように配慮した。

釣った魚の裏の文字を組み合わせることで、次の指令書の隠し場所がわかる。隠し場所は、意見を言うことが苦手な児童が愛読している図書にする。



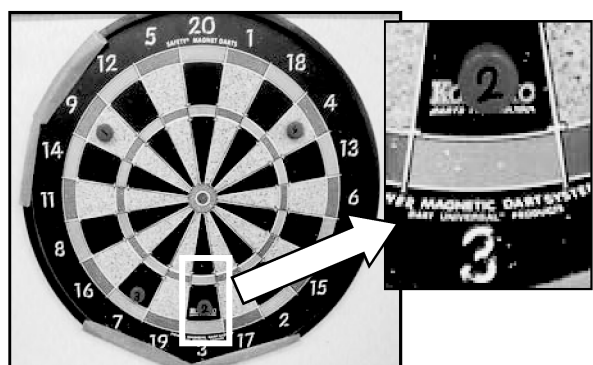
予想通り、その児童達は自分の好きな本だとすぐにわかり、自信を持って発言。その発言によってステージをクリアすることができた。

自分の意見が役に立つという経験をしたことで、その児童は、ゲーム時だけでなく様々な場面で意見を言うことが増えてきた。

周りの児童も人の意見を聞く重要さに気づくことができ、以後どのゲームにおいても人の意見を聞こうとするようになってきた。

エ 「ダーツ盤」 (仮説2)

一番先にやりたいと身勝手に取り組むと、解けない仕組みのステージである。



磁石がダーツ盤上に配置されている。置いてある所のダーツ盤の数字を、磁石に書かれた順番通りに並べると、かき氷器の入ったケースの鍵の番号になる。ダーツ盤の場所を意識せず、先走って磁石を取ってしまうと、置かれていた場所が分からなくなり、ステージがクリアできないという仕組みである。

予想通り、ほとんどのグループで一人が先走って

磁石を取ってしまい、行き詰まってしまった。「自分が一番先にやりたい。」という身勝手な行動の失敗体験の効果は期待以上に大きく、以後どのゲームにおいても先走る児童はいなくなった。

＜実践例2—ハロウィンのお菓子奪回作戦—＞

目的は、怪盗に奪われたハロウィンのお菓子を奪回すること。ステージ課題として、簡単な運動やハロウィンに因んだ英語活動も取り入れた。

2回目のアドベンチャーゲームなので、ゲーム全体のやり方が分かってくる、勝手な行動や逸脱が減り、皆で取り組もうとする気持ちは育ったが、その分互いに遠慮したり、慎重になり過ぎたりして、なかなか進まない場面も見受けられるようになった。

＜1年目実践後の課題＞

- 高学年にリーダーとして活躍する場を設定しなかったため、停滞する場面が多く見られるようになった。そこで、高学年のリーダー性を育て、チーム全体を見て効率的にゲームを進め、自分に自信を持って取り組む力をつけたいと考えた。
- 指導者からの評価のみであったので、児童自らによる目標設定、評価の時間も設けたい。事後に自分の言動を自身で振り返ることにより、自分を見つめ、自分の良さや変容に気付くことで、自己肯定感を高めることにつながり、かつ、自分の課題を意識することが向上心につながると考える。

（2） 2年目の実践

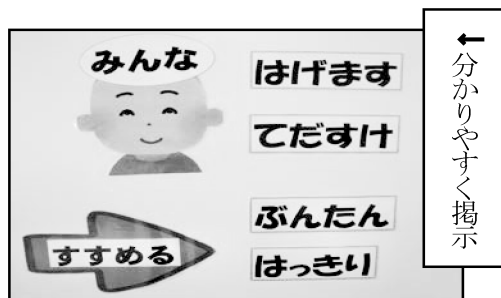
1年目のポプラアドベンチャーゲームの目標に、以下の2点の目標を付け加え指導に当たった。

- 高学年がリーダーとして活動できるようにする。
- 目標設定、評価の時間を位置付けることで児童自ら成長を感じ自己肯定感を高めることができるようにする。

ア 「高学年のリーダー性を育てる目標設定」

（仮説3）

高学年のリーダー性を育てるために、以下を提示した。



指導内容は以下の通りである。リーダーに求める内容を、実態に合わせて精選した。

（みんなのことを考えるために）

- できない子がいたら手助けする。
- 周りの子を責めずに励ます。

（ゲームを進めるために）

- それぞれの児童に合った課題を分担する。
- 大きな声ではっきり伝える。
声が小さい、聞き取りづらい言い方では相手に伝わらない事を自覚させる。

イ 「高学年がリーダーとして活動できるステージ」

（仮説3）

高学年がリーダーとして活動するために、分担が必要なステージ（音読や計算等）を設定した。

高学年児童は、どの課題なら担当できるか下学年児童に確認しながら分担し、リーダー自身は残りの部分を担当した。また、苦勞している児童を励ましたり、やり方を教えて再度取り組ませたりした。全員で課題をクリアし、皆で喜び合うことができるようになった。

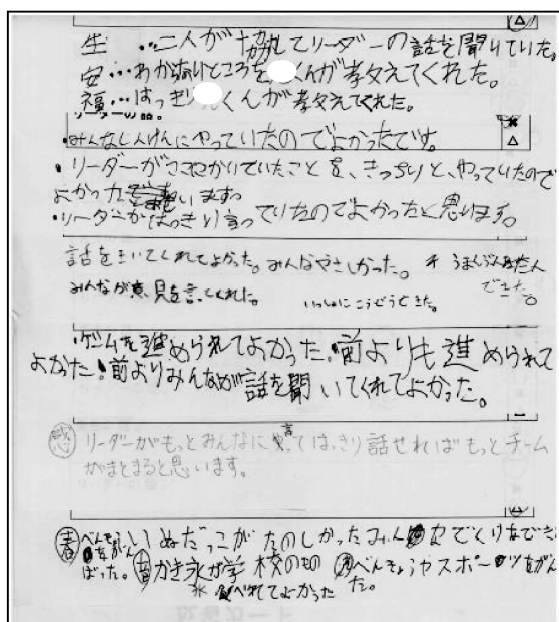
ウ 「目標設定、評価をする時間を位置付ける。」

（仮説4）

自分で目標を設定し、その目標を達成できたか評価する時間を位置付けた。

ポプラアドベンチャーゲームが始まる前に、自己評価シートを児童に渡し、シートの目標の中から頑張ろうと決めたものに丸を付けた。ゲーム後の反省会で自らの行動を振り返り、自分で決めた目標の達成度を◎○△三段階で評価させた。

児童の反省カードに書かれたコメントである。



主な内容として、まずリーダーは、「話をみんなが聞いてくれた」ことや「意見を言ってくれた。」ことに喜びを感じ、「ゲームを前よりも進められてよかった。」「(自分が) もっとみんなにはっきり話せばチームがもっとまとまると思う。」等とリーダーとして振り返ることができた。

また、メンバーは、リーダーが教えてくれたり、はっきり指示してくれたりしたことに感謝し、尊敬の気持ちも抱くようになってきた。また、みんなで真剣に取り組んだことや一緒に行動できたことを喜び、協力して取り組むことの楽しさを実感していた。

5 2年間の実践の成果

(1) 児童の変容から見る成果

- 通級教室での日常生活の中でも、他を思いやり、準備や片付け等を高学年が中心となって分担したり、分担する前に皆で率先して行動することが多くなってきた。順番等をじゃんけんで機械的に決めることがほとんどなくなり、自己中心的で、先走って行動しがちだった児童も、自分の衝動を抑え、他に順番を譲ったり、待ったりできるようになってきた。「協力」や「協調」の意味を体験的につかみ、その楽しさを実感していると感じる。
- 自分の意見を言ったり、人の意見を聞いたりする姿勢が身についてきた。挙手して意見を述べたり、人の意見を最後まで聞いたりする姿勢が身についてきつつある。

- 高学年児童が下学年児童に気を配るようになり、下学年児童は高学年児童を慕うようになった。そのため、曜日ごとのグループに集団としての意識が育ち、まとまりが出てきた。
- 目標設定、及び自己評価、相互評価の時間を設定することで、自分の良さや努力、成長を自分で感じ、さらに、他から肯定的に評価されることで、自己肯定感を持つことができてきている。また、今後の目標や日常生活でがんばることを進んで考えるようになり、向上心も育ってきている。

(2) 指導者としての成果

- 児童をさらに注意深く観察し、児童の持つ支援すべき特性について話し合うことを通して、個々の児童についてより共通理解を深めることができ、指導者同士のチームワークも向上した。
- 児童の実態に即した課題をわくわくドキドキしながら取り組ませていくという「ポプラアドベンチャーゲーム」に期待以上の効果があることが分かった。児童は例外なく最後まで夢中になって取り組み、達成感を味わうことができた。次回のゲーム内容のアイデアを出す児童も複数出てきている。児童のこうした意欲により、指導者としてもさらに教材研究の意欲が高まった。
- 本授業を1週間毎日公開することで、自校の通常学級担任との共通理解の場や教材・指導方法等の紹介をする機会が増えた。

6 今後の課題

- ポプラアドベンチャーゲームでは、児童の指導すべき行動が起こった時に、そのチャンスを逃さずすぐに指導することが重要である。そのためには、指導者間の十分な共通理解が不可欠であり、さらにきめの細かい協議を重ねる必要がある。
- 家庭や通常学級での生活への般化が大きな課題である。児童の変容が通級教室に留まらず、通常学級や家庭生活上でも何らかの形で現れるようにしていきたいものである。そのためには、今まで以上に担任や家庭と日常的に連絡を密に取り、より適切な支援の方法や接し方を共通理解して連携を強化していく必要がある。

学力向上を目指す学校経営

～子供の学力を保障する学校を目指して～

柏市立田中北小学校

校長 池 田 一 美

1 はじめに

本校は単学級、特別支援学級なし。私が初めて校長として着任した平成26年度は、児童数121名。

平成26年度当時の担任は、50代3名、うち1名は講師。40代1名新規採用教員。30代前半が1名、20代が1名という状況だった。新規採用教員や講師がおり、経験の少ない教員の占める割合が多くなっていった。

本校の課題は、何と言っても「学力向上」である。

柏市では、2年生以上の学力・学習状況調査を独自に毎年行っている。その国語と算数の結果が全国平均を下回っている。平成26年度の結果、第4学年は、国語・算数共に11ポイントマイナス、第6学年は国語6ポイントマイナス、算数は8ポイントマイナスであり、この二学年は年度始め、とにかく授業中さわがしい状況であった。

2 主題設定の理由

児童の実態と職員構成を考え、学力向上に重点を置いて取り組んでいくことが必須と考えた。

本校の学校教育目標は、「知性と徳性を備えた健康で人間性豊かな児童の育成」である。めざす児童像は「よく考え進んで学ぶ子」「思いやりがあり、よく働く子」「進んで体をきたえ、最後までやりぬく子」。「生きる力」を育むために、本校の教育目標にもあるように知徳体のバランスを考えた教育課程の編成はもちろんだが、本校の実態より学力向上を中心に置くことにしても、「知」確かな学力の部分だけでなく、「徳」や「体」も関わらせていくことが大切であると考えた。

それは、学力向上には、学び合う学級づくりの確立や自己肯定感を高めることなど豊かな人間関係が基盤となり、やり遂げる力を育むという点では健康・体力も関わってくると考えるからである。

学力向上を目指していくことを通して、教職員の指導力を高め、子ども一人一人が自分に自信を持ち、頑張ればできるようになるという実感が持てるようにしていきたいと考え、本主題を設定した。

3 研究の内容

学力向上を目指すために校長としてどのような学校経営をしていくことが必要か。また、教職員の指導力向上に向けてどのようにマネジメントしていくのがいいのか具体的な取組を通して明らかにしていく。

4 具体的な取組 1年目

(1) ビジョンシート作成

現状把握を踏まえ、中期目標、短期目標、取組内容、評価基準・指標を決めた。中期目標は、授業力向上「わかる授業の実践」とした。目指す姿は、全学年学力調査結果全国平均並み。家庭学習の取組などについて学校としてのやり方を明確にし、学校スタンダードとして確立する。指導方法等情報交換、改善方法を日常的に言い合い、高め合う教師集団とした。

短期目標は「授業改善」。目指す姿は、教師は児童の実態に嘆くのではなく自らの指導方法の改善という視点から見直し、実践できる。日常の授業の充実。全学年の児童が良く話を聞き課題に取り組んでいるとした。取組内容と共に、評価基準・指標を明確に示した。

(2) 学力・学習状況調査結果の分析をし、課題に対する手立てについて検討し、日常の実践の中で取り組んでいく

教務主任に働きかけ、分析方法、検討内容、日程等を含めた実施計画を立てさせた。研修会では、よいところと課題をまとめ、課題に対する手立てを考え、授業の中のどこでどのような指導に重点を置く必要があるのかを考えた。児童がつまづいているところを問題にかえり、各自の授業を振り返りながら検討することができた。各自の指導上のウィークポイントを知るきっかけとなり、日常の授業改善へと話が進んだ。校内研究会の指導案には、関連内容の正答率を記載し、どのような手立てを講じて改善を図るのかを明確にしていた。研究内容に直接関係する作文については計画的にスキルアップを図ることにした。

(3) 授業評価シート「授業を観る視点・する視点」を作成し、日々の授業改善につなげる

教務主任に働きかけ、授業評価シート「授業を観る視点・する視点」の必要性とその作成、生かし方について話した。授業評価シートを作成するにあたっては、「ユニバーサルデザインの視点を取り入れた授業づくり」の講座を教務主任と一緒に受講し、ポイントを理解させ、教務主任に作成させた。内容については、教務主任が提案し、模擬授業の中で実際に相互評価をしながら内容の確認をし、共通理解を図った。(図1)そして、日常の実践の中で活用していくことにした。

さらに、授業評価シート項目を中心に主幹教諭と校長による授業観察と指導助言を各担任に対して実施した。また、参観による指導だけでなく、主幹教諭自ら授業を

し、実践を見せることで担任が日々の授業改善につ

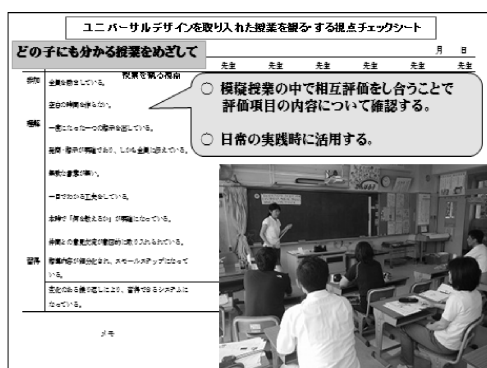


図1

なげていけるようにした。

また、通常学級にいる特別支援を要する児童への学力向上への対応として巡回指導だけでなく、校内授業研究会に特別支援教育担当指導主事も招聘し、個に応じた手立てが効果的だったかご指導いただくことにした。

(4) 若手教員の指導力向上

研修会の立ち上げ・指導主事との連携

主幹教諭を若手教員研修担当とし、若手教員のための研修会を発足させた。年間計画を作成し、必要となる事項を内容に盛り込むと共に、各自の苦手に対応できるように研修内容を工夫していた。

内容に応じて、授業名人やその道に長けた先生をお呼びして指導をいただいた。校長は、研修の様子を見聞きし、必要に応じて提案、アドバイスした。

また、指導主事と相談し、授業力の「見える化」のワークショップを組み入れ、授業のスキルアップを図る研修会の設定をした。研究主任も交えて話し合い、準備させた。

(5) 校内授業研究会を通して授業力を高める

研究主任に担任個々に応じた事前指導への関わりを持つこと、指導案検討会だけでなく、模擬授業の実施、

研究全体会の工夫としてワークショップ型で改善点まで話し合うように働きかけた。

特に、初めて指導案を書く講師や新規採用教員への支援、授業研究会以外でも必要に応じて主幹教諭や研究主任が支援している姿が見られるようになった。

また、全員による指導案検討会だけでなく、模擬授業をすることによって、学習問題の改善が行われたり、

個に応じた手立ての工夫が考えられたり、情報提供の方法が改善された



図2

りした。(図2)

(6) 学習規律・学習習慣への取組

教頭と教務主任には、全学年の授業に入り、児童の実態把握、担任との連携、担任への指導助言をしていけるよう配置した。生徒指導主任を中心に学習道具、生活・学習のルールを見直し、話し合い、共通理解をした。教務主任へは、家庭学習のさせ方の現状把握と共に家庭学習の仕方の共通理解を図った。

5 具体的な取組 2年目

校長2年目を迎えるにあたり、校長の役割について改めて大事だと考えたことが以下の内容である。

- 職員を“巻き込む”
- 課題を明確にし、ビジョンを示す
- 動きやすい組織づくりを示し、各自のミッションを明確にしていく
- 職員、組織への働きかけをしながら各自のミッションをより具体的に実現できるようにしていく
- 結果を検証し、成果をともに喜び、次のステップに進む

それを踏まえて、次年度に向けての準備と共に、次の一手を考えた。内容によっては、キーパーソンへ働きかけ、考えを取りまとめさせたり、職員に図る前に3者会議を開いて検討したりした。

(1) 教職員の参画意識を高める 課題の把握と手立てをみんなで考える一時間管理のマトリクス活用一

本校の課題についての教職員の合意形成を図るために、「時間管理のマトリクス 緊急度 重要度」を活用し、教職員の課題と考えている内容を把握した。

ビジョン作成前から職員の参画意識を高め、与えられたものから関わり共に作り上げるという実感を持ち、その後の学校運営にも積極的にかかわれるようにと考えた。課題はまとめると5つになった。

次に、その5つの課題に対する解決策を全職員で知恵を出し合う期間を設定した。職員室にホワイトボードを置いておき、付箋を貼っていったら、出てきた課題とその解決策についてまとめ、公表した。

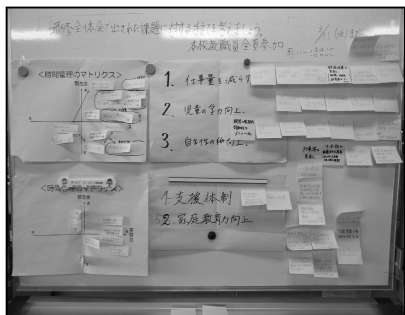


図3

(2)「学びづくりフロンティアプロジェクト」への応募

教職員からも出ていた課題解決のため、柏市で行っている学校経営ビジョン実現のため3年間にわたり重点支援する「学びづくりフロンティアプロジェクト」に応募することを決めた。

プランの内容は、本校の課題である学習意欲の向上として学び合う学級づくりの確立、個に応じた支援の強化、教師の指導力アップ、学習習慣の確立と小中連携による中1ギャップの解消という柱立てにした。

本校の教育課題に資する取組内容、年次計画、教育委員会に提供してほしい事業等をまとめ、教育課題解決ビジョンシートを作成した。

校長が動けば、人的・物的支援が得られる可能性があるのであれば、積極的に働きかけていく。その姿は、教職員にも良い影響を与えることができる。

(3) 学力向上プランを明確に示す

図4

平成28年度 田中北小学力向上プラン		学校教育目標 「知性と徳性を備えた健康で人間性豊かな児童の育成」	
学が意欲と学が習慣 社会に生きる力の育成	学が意欲と学が習慣 社会に生きる力の育成	よく考え自ら進んで学ぶ子 思いやりがありよくはたらく子 進んで体をきたえ健康でやる気の子	めざす学校 ◎志ある力と夢を育む学校 ◎地域に信頼される学校
	経営方針 ◎人・心・体・環境の4つの教育環境の整備・充実 ◎社会教育機関との連携による教育力の向上を図る ◎児童・教職員・保護者の三者が、互いに学び合い、共に成長する学校づくりを目指す ◎児童・教職員・保護者の三者が、互いに学び合い、共に成長する学校づくりを目指す	学校課題 自ら考え主体的に活動できる児童の育成 研究課題 意に反映し、考えを伝え合える子の育成 児童の発達段階 課題の明確化 → 共通理解 → 評価 → 改善策の決定し、改善の予定で実施	めざす教師 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師
重点的取組	「学ぶ意欲」 ◎学び合う学級づくり ◎「i-check」の活用・学習意欲の統一と見える化 ◎「文豪読書」の活用・「文豪」の確かな定着 ◎各教科領域における学習意欲の向上 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す学校づくりを目指す	「学ぶ習慣」 ◎家庭学習の習慣化 ◎家庭学習の習慣化 ◎家庭学習の習慣化	「学ぶ意欲」 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師
	「学ぶ意欲」 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師	「学ぶ習慣」 ◎家庭学習の習慣化 ◎家庭学習の習慣化 ◎家庭学習の習慣化	「学ぶ意欲」 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師 ◎「学び」の楽しさを伝え、児童の学びを促す教師

学校経営ビジョン全体図と学力向上プラン（図4）を作成し、その中に目標と目標値の明示、取組内容も含めた。教職員はもちろんのこと、保護者、学校評議

員にも説明する場を設けるとともに、地域には学校便り、そして、ホームページ上にも公表した。児童には、始業式で子ども向けに話した。

(4) 学校評価項目の見直し

学力向上プランを進める学校経営方針の見直しに伴い学校評価項目の見直しを教頭に指示し、経年変化を見取る内容の継続と共に、今年度のビジョンに関わる内容の追加をした。

それに合わせて、昨年度より始めた児童アンケートについても見直しを教務主任にさせ、検討し、年度初めに教職員とも検討し、保護者や学校評議員に知らせた。学校経営に関する検証の一つとして機能するよう考えた。

(5) 校務分掌の見直し

学校経営ビジョンを組織的に運営していけるように校務分掌の見直しをした。

「生きる力」の育成を意識した学校教育目標の3つの柱ごとのプロジェクト組織であることを明確にし、第2次「学びづくりフロンティアプロジェクト校」の指定を受けたことで、学校経営の重点である学力向上について、学びづくり推進員が中心に各分掌とつながるという分掌図に変えた。

特にその推進員には、32歳の主幹教諭に担当させようと考えた。キーパーソンが若い時には、特に見える形で役割を明確にしていけることが大切である。

(6) 前年度の取組内容の改善

前年度実施してきた内容についても改善させてきた。教務主任には、学力・学習状況調査の結果分析による昨年度比のまとめ、全職員による成果と課題、その対応策の見直しをさせた。その中で、1年間取り組んできて課題だった「書くこと」の領域の正答率がどの学年も高くなったことが挙げられた。研究内容分野でもあり、全職員で成果を喜んだ。課題もまだあるが、やってきたことの成果を実感させることは次へのエネルギーになると考える。

また、授業評価シート項目の重点化、授業力向上に関する取組の改善、家庭学習の手引きの作成については教務主任が自ら進めていけるようになってきた。

(7) 学び合う学級づくりの確立

学びを支える基盤となる学び合う環境づくりでは、教師の観察や感性、児童からのアンケートと共に数値として表れる「i-check調査」（図5）を年に2回実施することにした。自己認識、社会性、学級環境、

生活・学習習慣のカテゴリーごとの位置と教科学力との各相関関係や、学級における自己満足度がわかる。

その結果から、個や学級にどのような対応をしていくべきかを考え、学級がどの子にとっても居心地がよく、自己肯定感を高く保つことができるようにしていくように考えた。検証結果として再度調査した結果と比べていくようにした。

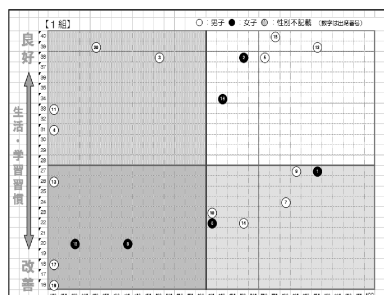


図5

(8) 学習意欲状況の把握

柏市教育委員会指導課は、柏市学習状況調査から、学習意欲や学習習慣を見とるために、内容を4つに分類し、数値化してくれる。4つの内容は

- ・コンセプト（見通す力）
- ・チャレンジ（挑戦する力）
- ・コミュニケーション（関わり合う力）
- ・コントロール（自律する力・生活力）である。

この数値を基に、学び推進員へ働きかけ、課題はどこか、学校全体として力を入れるべきことは何かをまとめさせると共に、全教職員で共通理解を図ってきた。

(9) 個に応じた支援の強化

「学びづくりフロンティアプロジェクト」の指定校となり、配置された人的支援について、学年の学力に応じた配置を考えた。

実際の支援状況については、日々の授業観察をする中で、図書館担当、理科主任、情報担当に働きかけ、指導員等が効果的に授業に関われるように考えさせたり、具体的に指導したりしてきた。

学力向上の一環として、4年生以上の算数の苦手な児童を対象に放課後算数教室や夏休み算数教室を実施するようにした。計画については、教務主任に担当させた。

(10) 学習習慣の確立

学習習慣の確立のために、家庭学習の手引き(図6)については、教務主任が作成し、教職員の共通理解を図ると共に、児童への働きかけはもちろんのこと保護者にも配布し、懇談会で説明した。手引きとともに、家庭学習の計画表や実施状況が分かるような表を提示し、継続して取り組めるようにした。



図6

(11) 学びの小小・小中連携

中学校になると、本校の小規模校と大規模校が一緒になることを考え、中学校区での小小・小中連携を強化してきた。中学校区の教頭には、中学校区全職員による学習や生活のルールなど学びに関わる情報交換の場の設定や研修計画、教務主任には相互授業参観のための情報発信を担当させ、教職員の連携を図ってきた。

さらに、児童同士、児童生徒の交流の場を設定してきた。特に小学校6年生同士の学びの交流として、おもしろ実験教室や芸術鑑賞会の実施、今年度は小学校版ビブリオバトルを予定している。

6 成果と課題

(1) 成果

柏市学力・学習状況調査分析では、一番平均正答率が低かった学年の推移を正答率だけでなく、成績分布経過からも捉え、アップしてきたことを実感した。(図7) なんとといっても学習態度が良くなった。クラスの雰囲気も良くなり、大きなトラブルもなくなってきた。この成果を共に喜び、次のステップに進もうという教職員の意欲につながってきた。努力が報われることの体験は教職員にとってとても大切なことであると考え。

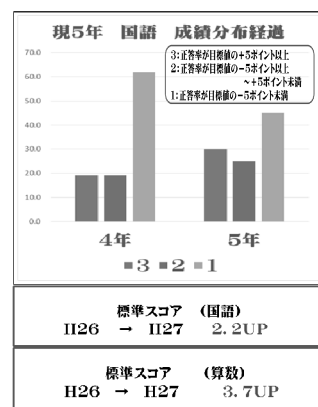


図7

こうした取組をしていく中で、何と言っても若手教員の学ぶ意欲が高まってきた。土曜塾や大学の公開講座の受講。公開研究会への積極的な参加。そして、主幹教諭による近隣の若手教員を集めての体育の合同実技研修会の開催など積極的に学び始めた。

(2) 課題

取り組んできた内容に関する結果の検証を最終的な学力・学習状況調査や4Cの結果だけでなく、手立てとして取り組んできた内容に関する効果の有無や改善点を更に明らかにしていくことが必要である。

7 終わりに

今後も目指す方向を明確に示し、教職員一丸となって取り組み、検証しさらに改善するようマネジメントしていく。また、次期学習指導要領改訂を機会に、児童の学力向上という視点からカリキュラムマネジメントにもさらに力を注いでいきたい。

随筆の特性を活かして「書く力」を高める学習活動の工夫

～個性を引き出し、伝え合う場づくりを通して～

旭市立滝郷小学校

教諭 見 山 望

I はじめに

私は平成20年度に千葉県長期研修生として国語科の「書くこと」の領域で随筆の研究を行った。平成23年度から完全実施となった現行の『小学校学習指導要領』の中で、初めて随筆が言語活動例として示されたこともあり、相談を受けることが多く、随筆について研究を深めている現状にある。そんな中、所属校では「ワンポイントステップアップ授業参観」と称し、得意とする内容で授業を公開し、互いの研鑽を深めることになった。本論文は、この8年間で培った随筆の基礎研究を基に本年度行った授業の実践報告である。

II 主題設定の理由

「随筆って何?」「何をどう書かせればいいのか?」平成23年4月に現行の小学校学習指導要領に準拠した教科書を一目見た教師の多くがそう思ったに違いない。その理由として、以下の3点が挙げられる。

- 随筆を作品として成立させるために必要な内容や構成、文体が不明確であったこと。
- 生活の中での随筆がどのように活かされているかが分からず、学習活動が構成できなかったこと。
- 指導者側の経験不足から、児童への指導や支援の仕方が分からなかったこと。

つまり、随筆をつかって書く力を伸ばすためには、随筆とはどのような文章なのか、生活の中でどのように使われているのかといった特性を明らかにし、それが活きる学習活動を構成する必要があると考える。以上の理由により、本主題を設定した。

III 随筆に関する基礎研究

1 随筆の内容や構成が不明確な理由を解明する

随筆の特性を知るという目的で作品を読み始めると、そこに書かれている内容や表現形式の多様性に途方に暮れてしまう。何作品か読めば、内容や形式で随筆を定義付けることが不可能であることが分かる。同時に共通して表現されていることがあることに気付

く。それは、その人にしか表現できない個性的な自己の思いである。内容や形式が多用である理由は、思いを形づくる素材が、生活の中にいくらでもあるからであり、それを表現する手段として、説明や評論、詩や物語といった多くの文章表現の手法を必要に応じて取り入れるからだと考えられる。

2 随筆は生活の中でこう活かされている

随筆には「個性的な自己の思い」が表現されていると述べた。似たようなジャンルに日記がある。単に備忘録的な側面もあるが、文章化することで自らの内面を深く見つめるために行う場合があるからだ。それだけに、日記は一般的に自分のために書く文章であり、分かりやすさや面白さは考慮されないし、他の人には見せられない内容が含まれることも少なくない。

片や随筆は『小学校学習指導要領解説国語編』に「身近に起こったこと、見たことや聞いたこと、経験したことなどを他の人にも分かるように描写した上で、感想や感慨、自分にとっての意味などをまとめたもの」(文部科学省、東洋館出版、2008、p.85、下線筆者)とあるように「思いを伝える」はたらしを持つことができる。これはネットワークを用いたブログ等と同じ、コミュニケーションの手段として利用されてきたと見なしてよいと思われる。読み手がいる以上、分かりやすさや読み手を楽しませる工夫が求められる。このような特性を活かした学習活動を行わせることは、「書く力」を高める上で有益なことだと考える。

3 支援の仕方をこう考える

これまで述べてきた通り、随筆は内容的にも形式的にも多様である。児童に指導する際これが大きな問題となる。内容が限定されていたり、形式に型があったりすれば、それを指導すればよいが、あらゆる内容を、どのように書いてもよいのだから難しい。そこで考えたのが、たくさんの作品に触れさせて、必要な事柄を取り入れさせるという手法である。この点について参考にしたのが、千葉大学教育学部名誉教授の首藤久義の理論である。「一前略一示す作品例は、タイプの異

なる複数のほうがよい。なぜなら、例が複数ある場合には、それぞれの例を比較して、何が共通する要素で何がそれぞれの例に特有の要素かを見分けることが容易になるからである。何が共通に要求されているのか、自由に変えてよいのはどの部分なのかの区別が付きやすくなるからである。そして、共通に要求される要素は落とさず、かつ、そのほかの自由にかえてよい部分については、思い切って個性を発揮して製作に当たることが、より容易にできるようになるからである。」（『ことばがひろがる I』 pp. 124-125）これは、「書くこと」の学習一般について述べられたものであるが、随筆については、非常に有効な手立てである。多くの作品に触れることで、どのような題材が選ばれているのか、どのような形式で表現されているのかを経験的に学習させていくことで、随筆のもつ多様性に対応させていきたい。

Ⅳ 研究仮説

これまで述べてきたことを踏まえ、次の二つの仮説を設定した。

- 仮説1：複数の作品を見本として示せば、児童は必要とする内容や表現を取り入れ、個性的な作品を書くことができるだろう。
- 仮説2：他者に公開することを前提に作品づくりを行えば、児童は読み手を意識し、分かりやすく、楽しませる工夫をし、書く力が高まるだろう。

Ⅴ 単元について

- 1 単元名 「海」に対する思いを伝え合おう
〔平成28年10月13日～10月19日（5時間扱い）
旭市立滝郷小学校6年1組にて実施〕

2 単元観

(1) 随筆における学習の経緯

児童は6年生になって古典『枕草子』の冒頭を含め、三つの作品を読み、『枕草子』の冒頭を真似て随筆を書く経験をしている。この単元は、児童にとって、本格的に随筆を書く機会になる。その際、テーマを自由に選ばせるのではなく、こちらから主題を一つ与え、個々の様々な切り口から、作品づくりを行うことで、自分と他者との違いを浮き彫りにしたいと考えた。そこで思い付いたテーマが「海」である。

(2) テーマを「海」とする理由

勤務校の属する旭市は、九十九里浜の北端にあり、

屏風ヶ浦の南端に位置している。風光明媚であり、夏季には海水浴客で賑わうとともに、水産業も盛んである。さらに、東日本大震災の折には、千葉県内で唯一、津波の被害を受けている。こうした地域性や経験は「海」に対して児童に様々な思いを抱かせるのに十分であり、個々の思いを表現させるには、格好の素材といえることができる。

(3) 随筆の特性を活かした学習活動づくり

学習を進めるにあたっては、随筆の特性である他者への公開を学習のゴールに据える。その際、感想を交流させることによって、自分の活動の成果を確認することとする。そうするとによって、書くことに対する意欲を向上させていきたい。また、他者が読んで分かりやすく、面白い作品づくりをさせるための素材選びや文章表現の工夫といった学習活動の動機ともなっていくだろう。

3 指導観

(1) 導入段階において

単元に入る2週間程前から、作品例となる本や冊子を児童に紹介し、朝の読書タイムや休み時間を利用して、読んでもらう態勢を整えた。作品に多く触れれば触れるほど、随筆というジャンルへの理解がふかまり、作品づくりの際に題材や形式が、より多様になることをねらったからである。素材選びでは「海」というテーマから、連想することを挙げさせ、エピソードを紹介させることで、交流を図り、発想を広げさせていく。

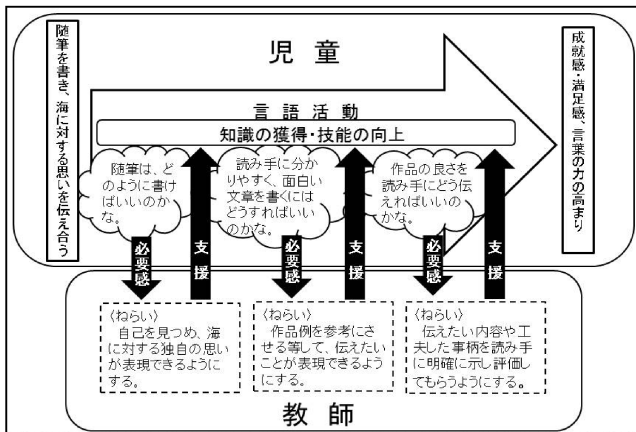
(2) 作品づくりの段階において

「書くこと」の支援として、よく行われることが構成メモの作成である。構成メモは作品の完成形を見通す力が必要になる。観察記録文や説明文等であれば、6年生なら何度も読んだり書いたりしてきた経験がある上に、順序に並べるという型があるため、比較的容易に作成できるであろう。しかし、この段階の児童が随筆で構成メモを作成することは、作品を一つ仕上げることに同等の労力を要する場合もあり得る。そこで構成メモについては、書きたいことをいくつか付箋に書いて、順番に並べる方法があることを紹介し、必要ならば行う程度に留める。今回は、迷うたびに作品例を参考にさせたり、一緒に考えたりして、伝えたいことが表現できるようにしていきたい。そのために、気に入った作品や表現に付箋を付ける等して、効率よく活動できるようにさせていく。

(3) 目的達成の段階において

作品が完成し、互いの作品を交流させる段階においては、伝えたかった内容や工夫した事柄が、他者にどう受け入れたかどうか確認させたい。そうすることで児童は成就感や満足感をもつことになる。こうした成功体験が、この学習を日常生活や次の学習に活かす意欲になるに違いない。

以下に、この単元の構想図を示す。



資料1 単元構想図

VI 学習活動の様子

1 導入段階において（1時間扱い）

導入段階では自分の中にある「海」への思いや考えを見つけさせたい。そこで下のワークシートを行った。

The worksheet is divided into two main sections. The top section is titled '海' (Sea) and contains a grid for writing '海' (Sea). The bottom section is titled '海' (Sea) and contains a grid for writing '海' (Sea). The worksheet also includes a section for '海' (Sea) with a grid for writing '海' (Sea).

資料2 導入段階でつかったワークシート

児童には、本時の終末に「海」からイメージした言葉でビンゴゲームをすること、ビンゴのマスは25こあるので、協力して埋めるようにすることを伝えた。ワークシートには、10この題材例を示し、さらに具体化したものを三つ考えさせ、それを全体の前で発表させた。その際、知っていることや考えていること、体験談等を発表させたり、随筆にするならどうするかを全体で考えさせたりすることで、随筆の素材探しができるように配慮した。「光っている水面」という意見が出た時などには歓声があがり、共感的な雰囲気

授業が進んでいった。

ビンゴゲームをした後、私が自作した「牡蠣とり」（説明が中心）、「海派？、プール派？」（意見が中心）、「楽しいはずが」（海水浴で溺れかけた体験談、情景描写中心）といったタイプの違う3作品を示し、作品づくりで参考になるところがあれば、取り入れるように告げ、1時間目の授業を終えた。

2 作品づくりの段階において（3時間扱い）

2～4時間目は、随筆の下書きの時間と位置付けた。初めに前出のワークシートに作品のテーマを書いてから下書きに取りかかるように指示すると、半数ほどの児童が、すぐに原稿用紙を取りに来た。前時の段階で、テーマを決めることができた児童が多くいたことが推察される。また、書きたいという気持ちが態度に表れているように見受けられ、構成メモをつくっている児童はいなかった。

これまでの経験から、書くことの指導を行うと教卓の前に行列ができてしまうことが多かった。それを防ぐために整理券を用意し、相談したり、見てもらったりしたいことがあったら、すぐに整理券を取りに来て、順番が来るまでは別の作業を進めているようにした。

児童からは、未習の漢字の書き方や表したい事柄の表現の仕方、落ちのつけ方等の質問が出たため、一緒に考えながら作品づくりを行った。清書を終えてから、手直しを申し出る等、最後まで粘り強く作品づくりに取り組む児童の姿が見られた。

作品を読むと、出だしを読者に語りかけるように始めたり、二つの対象を比べて意見を述べたりする等、見本を参考に、読み手を意識した作品が多く見られた。特に指摘したわけではなかったが、多くの児童が「海」というテーマに対して、他者とは違う切り口をしようとした後がうかがえた。以下に児童の作品を示す。

The image shows a 25-square bingo grid filled with Japanese text. The text is written in a cursive style, typical of children's handwriting. The grid is divided into four quadrants, with the top-left quadrant being the largest. The text is written in a way that suggests it is a story or poem about the sea.

資料3 児童の作品①

資料3は、スイカ割りの様子が、情景描写を通じて

表現されている。筆者にとってのスイカ割りの価値が表現されているところが面白い作品である。本児は、書くことがあまり得意ではなく、量が少ないことを気にしていたので、今回は作品の長さは気にしないことを伝え、作品としてまとまりがあることを誉めると、うれしそうにしていた。

[illegible]

「資料4」は、夕日の美しさを印象的に述べた作品である。海に沈む夕日を美しいと感じる人は多いだろうが、姉と兄が同意してくれたことうれしさを合わせて表現したところに本児の独創性がある。家族の温もりを感じる作品となっている。

海の子	港郷小	六年
私は、いつも海の前を速く走つ事がある		
サーフ、走している人たちや、泳いでいる		
人たちは、大きな魚がこわくないのか		
私は、あんなにうれしく、笑つて、海の子に		
私は、小学一年生の時、父と一緒に		
D.V.D.をかりて来た。兄は、アワツ、ニヤホ		
ーが大好きなので、かりてくる時は、いつ		
も、アワツ、ニヤホラーものばかり、ウレシ		
く、兄が借りて来たD.V.D.の名前は、"ツリビ		
と"だった。見始めると、最初はきれいな海が		
でてきたので、おもしろそうだなと見ていた		
ら、ところ、うが海がさらになるような事		
は、ガリ流れていった。		
内巻は、海の子を泳いでいた。いさな		
り巨大ザメが後ろから来て食べられてしま		
う。な、そう、うのはガリた。た、私は、それ		
を見てから、船所の海にも巨大ザメが、い		

資料5は、見本例の「楽しいはずが」を参考に、あるきっかけで「海」に対する印象が変わってしまった経験を書いたものである。題材については、1時間目にサメの話題が出た時、映画『ジョーズ』を見たことを思い出したそうだ。映画からというのは独自の着想で、大変面白い作品となっている。

へはなりかと思つて　海のやこに行くだん
 なくな　てしま　た　をれに　ねがたまに
 にくと　地引　網　を行　て　いて　網の中には
 小でなサスで　ワリ　エイ　そ　ガ　ひ　が　つ
 てるの　た　それが　い　せ　におをい　か
 てる　事　も　像　して　しま　う
 小へ　に　見た　り　の　後　にな　て　て　と
 う　た

資料5 児童の作品③

3 目的達成の段階において（1時間扱い）

5時間目は、友達に作品を読んでもらうことで、目的を達成する活動を行なった。自分が伝えたい内容や工夫した表現を示し、ねらい通りになっているかを相互評価した。また、評価の内容や表記の仕方については見本例を示し、参考にしてもよいことを伝えた。以下に児童の書いた評価を示す。

海のそこてなにか 出るかわからない 私も、クラゲが海に いまからいつまで ビクビクしながら海に 入るよ！でもうし ても海に入りたくな りときてあるんだよ ね！	私は、 ガラガラという音でいいと 思っています。 僕は、お母さんやお父さん、 お姉さんやお兄さんと 一緒にいます。	わたしは、 人に話して、いてるみたいでとても喜 れます。そう所は、私もテレ ビですが、みたことがなかったの で、みてみたいと思います。 あて、みなさんもみたいです。
---	--	---

資料7 相互評価の一例

これはほんの一例であるが、ほとんどの評価が作品を肯定的にとらえたものであり、全ての児童が他者に認められたという成功体験を積むことができたと思われる。こうした経験は、書くことに対する自信を深め、これからの生活や学習に生きてくるものと信ずる。

VII 成果と課題 (○成果・▲課題)

1 仮説について

○複数の作品を見本として示したことで、児童は必要とする内容や表現を取り入れ、個性的な作品を書くことができた。

○他者に公開することを前提に作品づくりを行ったことで、読み手に取って分かりやすく、楽しませる工夫のある作品を多く書くことができました。

▲これまで書いてきた生活文のような表現をしている作品が数点見られた。記述の段階で、しっかりと確認できるように時間を工夫する必要があった。

2 その他

○導入段階で、「海」に対するイメージを交流させたことにより、発想が広がるとともに、表現したい内容が明確になり、書きたいという気持ちを高めることができた。

○整理券を活用することにより、児童が並ぶ時間が少なくなり、作品づくりを行う時間が確保できた。

▲自己開示ができない児童に作品を書かせるのは難しい。カウンセリングの手法を取り入れる等の工夫が必要である。

獎 勵 賞
(佳 作)

【奨励賞（佳作）】

学校部門

千葉県立実籾高等学校	校長	關 晶子	高等学校における歯科保健教育の取り組みについて
千葉県立流山おおたかの森高等学校	校長	吉田 富昇	学校全体で取り組む主体的な活動の推進
市川市立行徳小学校	校長	吉野 和雅	総合的な学習の時間を通して、豊かな学びを育む
習志野市立実花小学校	校長	渡邊 岩夫	たのしさ・充実感が味わえる算数科学習のあり方
八千代市立萱田南小学校	校長	平瀬 典子	共に考え学びを深める学習をめざして
野田市立柳沢小学校	校長	阿部 雅彦	学ぶ意欲を高める指導法の工夫
流山市立東小学校	校長	菊岡 義一	学び合い、伝え合うことのできる児童の育成
鎌ヶ谷市立東部小学校	校長	小島 邦夫	自分の思いや考えを豊かに表現できる子どもの育成
成田市立久住小学校	校長	依知川典子	算数科における思考力・表現力を高め、生き生きと学ぶ児童の育成をめざす授業づくり
九十九里町立九十九里小学校	校長	佐瀬 一生	地域の「財」を活用した「豊かな学び」の展開
御宿町立御宿小学校	校長	三上 雄二	自らの命を守り抜くため「主体的に行動する」児童の育成
いすみ市立大原小学校	校長	渡邊 宗七	UD（ユニバーサルデザイン）の視点に立った授業づくり
君津市立八重原小学校	校長	山口 一也	自分の思いや考えを豊かに表現し「学び合う子」の育成
千葉市立小中台中学校	校長	渡邊 博典	環境学習を通して、生徒の意識の変容を目指す
千葉市立花見川中学校	校長	備中 隆文	統合校として修学旅行の経過的取り組み
市川市立福栄中学校	校長	西澤 康男	福祉教育を通じた地域との連携
浦安市立明海中学校	校長	若菜 秀彦	学校改善へのチャレンジ「指導」から「支援」へ
いすみ市立岬中学校	校長	尾川 幸男	将来のみさき人を育てる
木更津市立金田中学校	校長	大河原敏雄	伝統文化を大切にし、思いやりのある生徒の育成

【奨励賞（佳作）】

個人・グループ部門

千葉県立千葉中学校・千葉高等学校	教諭	中川 雅彦	中高一貫校での取組と今後の展望
千葉県立検見川高等学校	教諭	小賀野大一	生命を育み地域の自然の理解に繋げる教育実践
千葉県立浦安高等学校	教諭	村上 元一	積極的な生徒指導の実現
千葉県立柏中央高等学校	教諭	鳥塚 義和	学校開放講座「紡ぎ・染め・織る－手仕事を楽しむ」
千葉県立佐倉南高等学校	教諭	大上 恵司	美術の授業で心を育てる
千葉県立船橋北高等学校	教諭	條 冬樹	「はじめての選挙」参議院選挙をテーマとした討論・参加型授業

千葉県立桜が丘特別支援学校	教諭	中村 吉伸	肢体不自由児の防災教育の取組
千葉県立仁戸名特別支援学校	教諭	渡部 智美	不登校からの学校生活づくり支援
千葉県立松戸特別支援学校	教諭	山田 康朝	肢体不自由を有する児童生徒を対象とした通級による指導の実践
千葉県立 特別支援学校市川大野高等学園	教諭	濱本 武將	本物の働く力を育み、笑顔輝く生徒の育成
千葉市立院内小学校	教諭	渡邊 美穂	子どものレジリエンスを育てる指導のあり方
船橋市立八栄小学校	教諭	若松 祐次	一人一人が輝く学級経営の在り方
浦安市立舞浜小学校	教諭	戸田 道也	生きる力をはぐくむ総合的な学習の工夫と改善
市川市立大和田小学校	教諭	河野 太郎	既習を生かし、見通しを持つことで主体的に学習に取り組む児童の育成
市川市立大和田小学校	教諭	鈴木 美菜	よく考え、伝え合い、豊かな学びを実現する子 思考力、判断力、表現力の育成を通して
市川市立大和田小学校	教諭	富永加代子	よく考え、伝え合い、豊かな学びを実現する子 N I Eの日常化を通して
市川市立大和田小学校	教諭	流 雄希	よく考え、伝え合い、豊かな学びを実現する子 はがき新聞の有効活用を目指して
松戸市立六実小学校	教諭	柳田 良雄	アクティブラーニングの授業づくり
松戸市立梨香台小学校	校長	山口 昌郎	教員に力をつける研修体制の試み
柏市立大津ヶ丘第一小学校	教諭	井上 昇	情報モラルの最新事例・主体的に判断し、自ら正しく情報を発信できる児童の育成
横芝光町立上堺小学校	教諭	飯森 敬	小学校高学年における学習集団の質的向上に関する研究
木更津市立波岡小学校	教諭	古舘 良純	一人一人が輝くコミュニケーションの在り方
千葉市立高浜中学校	教諭	伊藤 拓也	「理科が好き」「理科は生活に役に立つ」と考える生徒の育成
市原市立国分寺台中学校	教諭	小甲はな恵	身近な生活に生かせる知識・技能を育む授業づくり
船橋市立湊中学校	校長	太田 保	「いのち・こころ・人とのつながりを育む」健康教育の充実
習志野市立第一中学校	スクール カウンセラー	小沼 豊	教職員間の連携を促進する効果的な教育相談の展開
八千代市立陸中学校	教諭	河瀬 農	家庭学習を通して自律的に学習できる生徒を育て学力の向上を図る
佐倉市立臼井中学校	教諭	根本 栄治	「そうか、なるほど」を引き出す授業をめざして
銚子市立第三中学校	教諭	神原 真人	興味・関心を育むための授業づくり

平成28年度募集

教育実践研究論文集

— 第31号 —

平成29年 3 月25日 発行

発 行 公益財団法人 日本教育公務員弘済会千葉支部

千葉市中央区中央4-13-10

(千葉県教育会館新館)

電話 (043) 224-8851